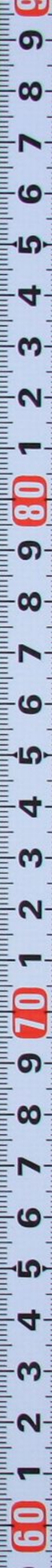


二十四輩順拜圖會

後篇

下總

常陸二



親書聖人 御書蹟 二十四輩順拜圖會後篇卷之二

目錄

○下総之部

- 中戸山常教寺
- 屈旋山阿弥陀寺
- 大生天律
- 雁崎の史乘
- 大高山
- 新居山祿名寺
- 高雲山法得寺
- 佐河建法徳寺
- 群児の養夜
- 一谷山妙安寺
- 極樂山西念寺
- 飯沼羅刹を供するの史乘
- 大高山願牛寺
- 新境山弘徳寺
- 五日宮寺像
- 野田院宗願寺
- 徳富山勝教寺
- 純子口
- 一谷妙安寺
- 撲留根岡光寺
- 花崎寺即云清光寺
- 牛本の史乘
- 多柳山弘徳寺
- 日矣流
- 古河御城
- 高柳山光了寺
- 香光明律



法橋寺 霞の浦  
勝齋備

○常陸之部

西本山光明寺

小治山三月寺

三月寺乃旧地

佛名山常福寺

筑波山大御堂

一山の奥に  
遊秋の遊場

佛命山如來寺

大蛇解脫

大寺の堂正妙寺

大蛇解脫

板敷山

福田山西念寺

笠岡光照寺

以上

親鸞聖人御舊蹟 二十四輩巡拜圖會後編卷之二

河州專教寺

了貞撰

下総國

石末修人の國の名を信じて今按ると右信濃は天富余と求法漢多行故母邦  
率性亦本林陸海親好母不生故謂之信國親本不生故謂之信國親本不生故謂之信國親  
本不生故謂之信國親本不生故謂之信國親本不生故謂之信國親  
好母の生るを信の國といふ本生を信の國といふ本生を信の國といふ本生を信の國といふ  
上下より之を信の國といふ本生を信の國といふ本生を信の國といふ本生を信の國といふ

中戸山常敬寺

西流 下総國葛飾郡河邊の庄園名  
領野方深掘中戸村あり

西光院と稱せし關東七箇大寺の一として高祖聖人の所孫唯若上人の送跡あり

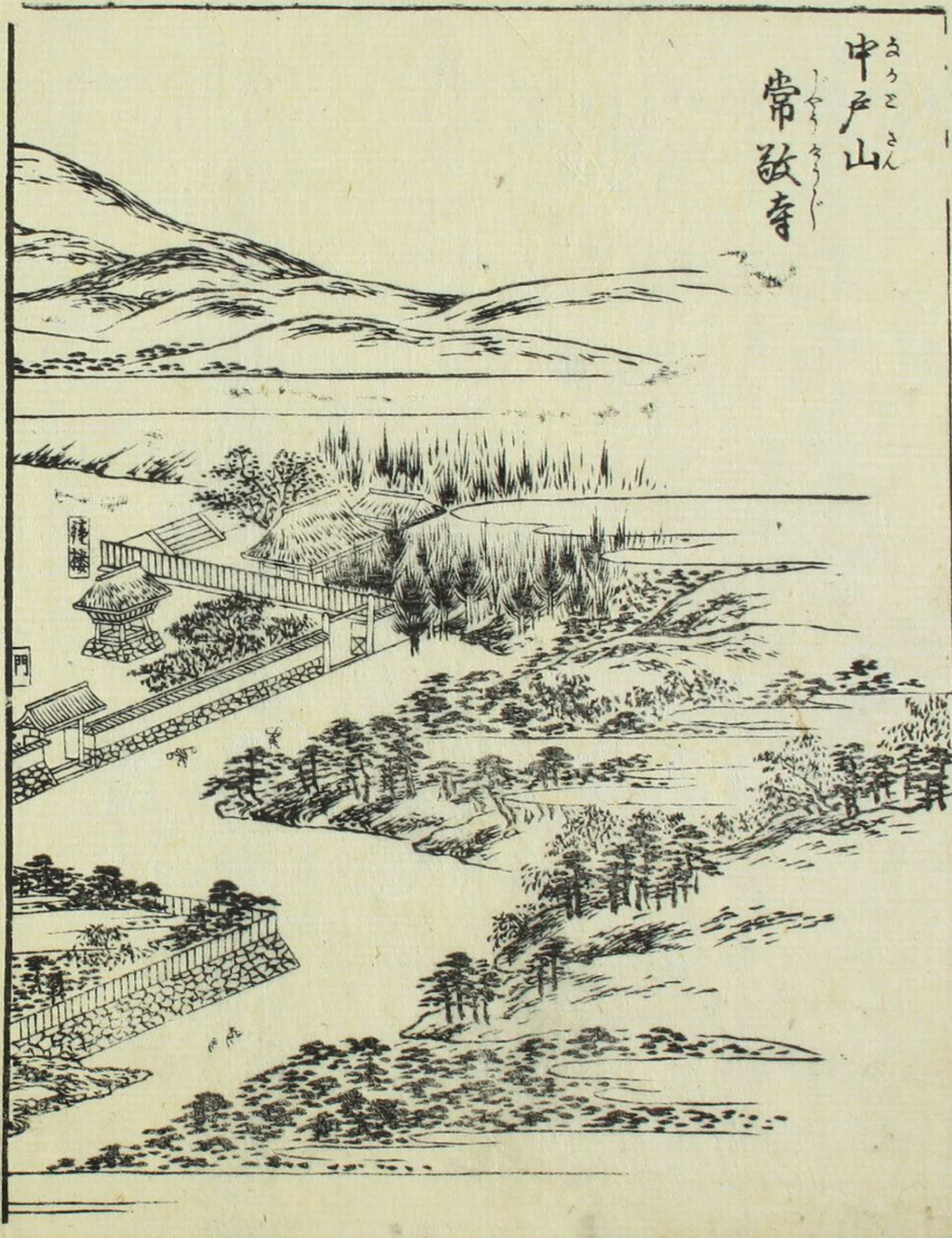
唯若上人は祖の所息女孫女の所方法号光信 御影堂十間親

鸞聖人御真像を唯若上人の所作 或いふ山本に世 阿彌陀堂の平

尊に定朝の作なり 山本にありて所教堂阿彌陀堂 什室より法然上人

撰譯相傳の所影を死む 法然上人御自画像あり 御聖人御自画像あり

當山の岡基を易とば往時延慶二年の春唯若上人相州より



中戸山  
常敬寺

向一化益ありて移るる若く軍惟康源く飯依一移り此地一七  
堂伽藍と建立して上人の寄附せらるる花園天皇を於て中戸山  
西光院の勅号と賜ふ而より代々法燈とほく文々相續しつるふ  
第十世了照の附よきて兵火のあはれ焼失はれ天正年間  
そと長秀吉の山條氏政と征く移る後なり此時故ありて尚山  
と二箇寺に分らるる城後國高田に移りて両寺とも  
中戸山常敬寺と稱は

一谷山妙安寺 東流

日圓後徳郡 三村あり

高祖聖人のるや二十四輩第六一の谷成徳所坊の遺跡也  
成徳坊の傳記山開基の始末審ふに編と野國麻橋妙安寺  
の傳記に載はれ此の地は三村麻橋のあはれを切りて移るる  
ととくも法燈とほく文々相續しつるふ  
石に一字を建後入聖人と相議て堂趾と定む從は故入聖人

とて植はるる松の樹とく造き以て尚存せり是を予子  
の松と稱す○靈宝の尊阿弥陀佛の像の基の他  
日画像の恵心僧都の尊聖徳の子のる教の雅有と宗祖  
山聖人の御傳なり其外蓮如上人所筆の六字名号實如  
證如両上人所筆の御文等あり

一之谷妙安寺 東流

三村と中戸との 中間一のやあり

即成然房住居の地なり尚寺の成然房最初建立の寺内

成然所坊の墓あり

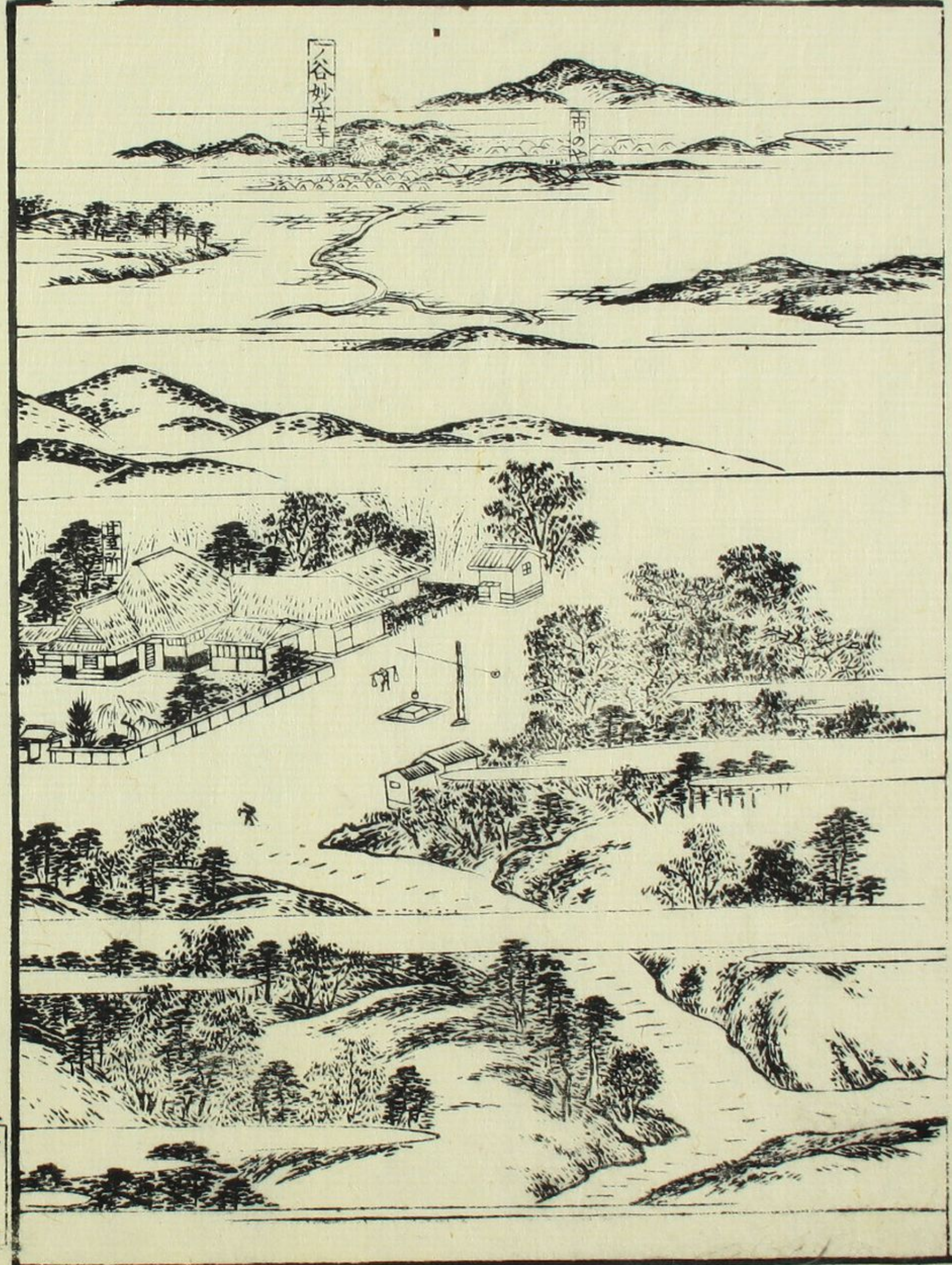
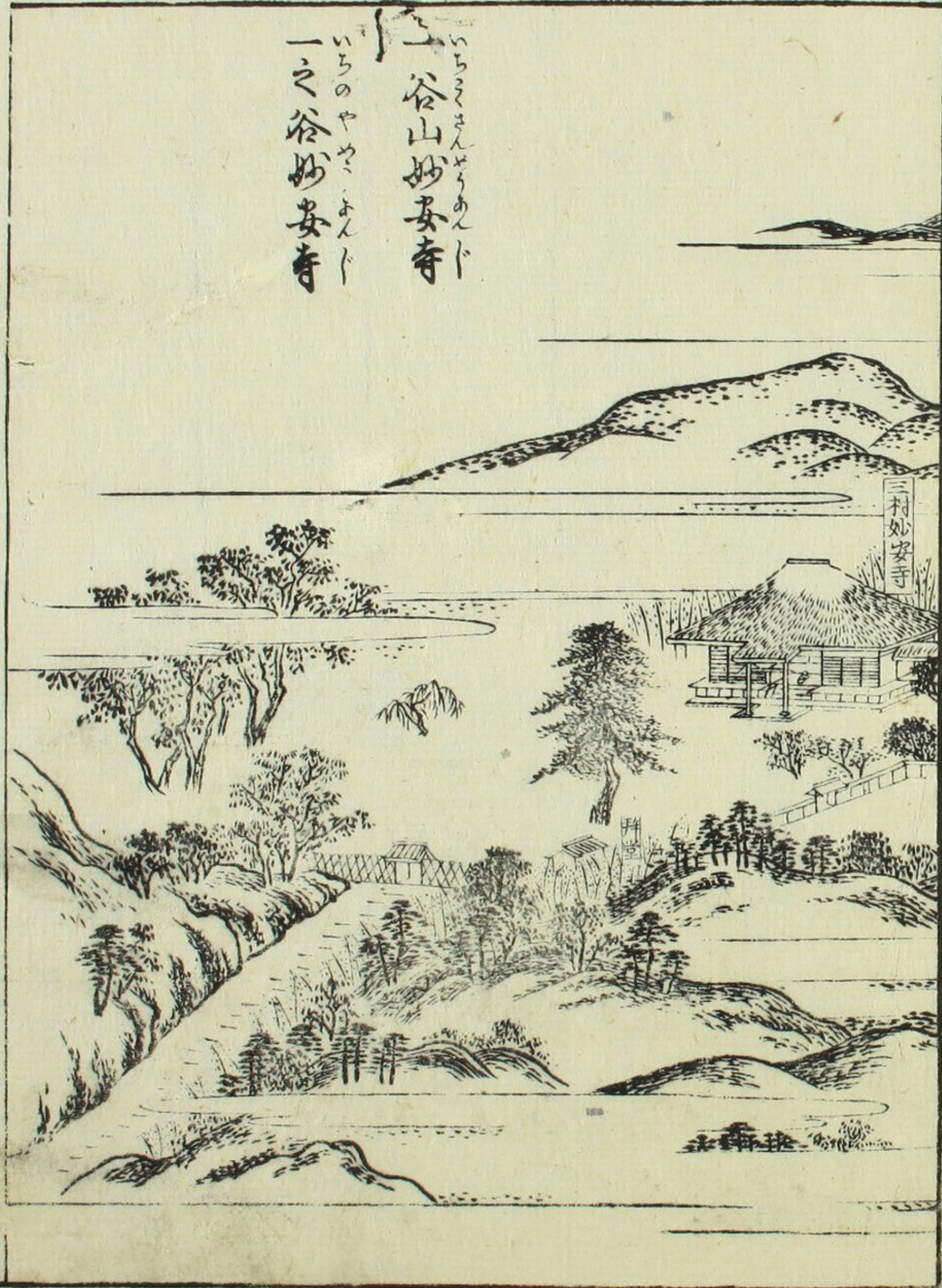
境内寺あり 三ノ二

屈旋山阿弥陀寺 東流

日圓日郡 長洲あり

當寺の親鸞聖人の門弟安了房の遺跡なり一ノ三論宗  
とて屈旋龍山稱名院と号し慧禎法師の草建八世相續し澄慧  
の附よきて天台あり第十世安了の附貞應二年高祖聖人

いちごさんせうあんト  
谷山妙安寺  
いちのやうさんト  
一之谷妙安寺

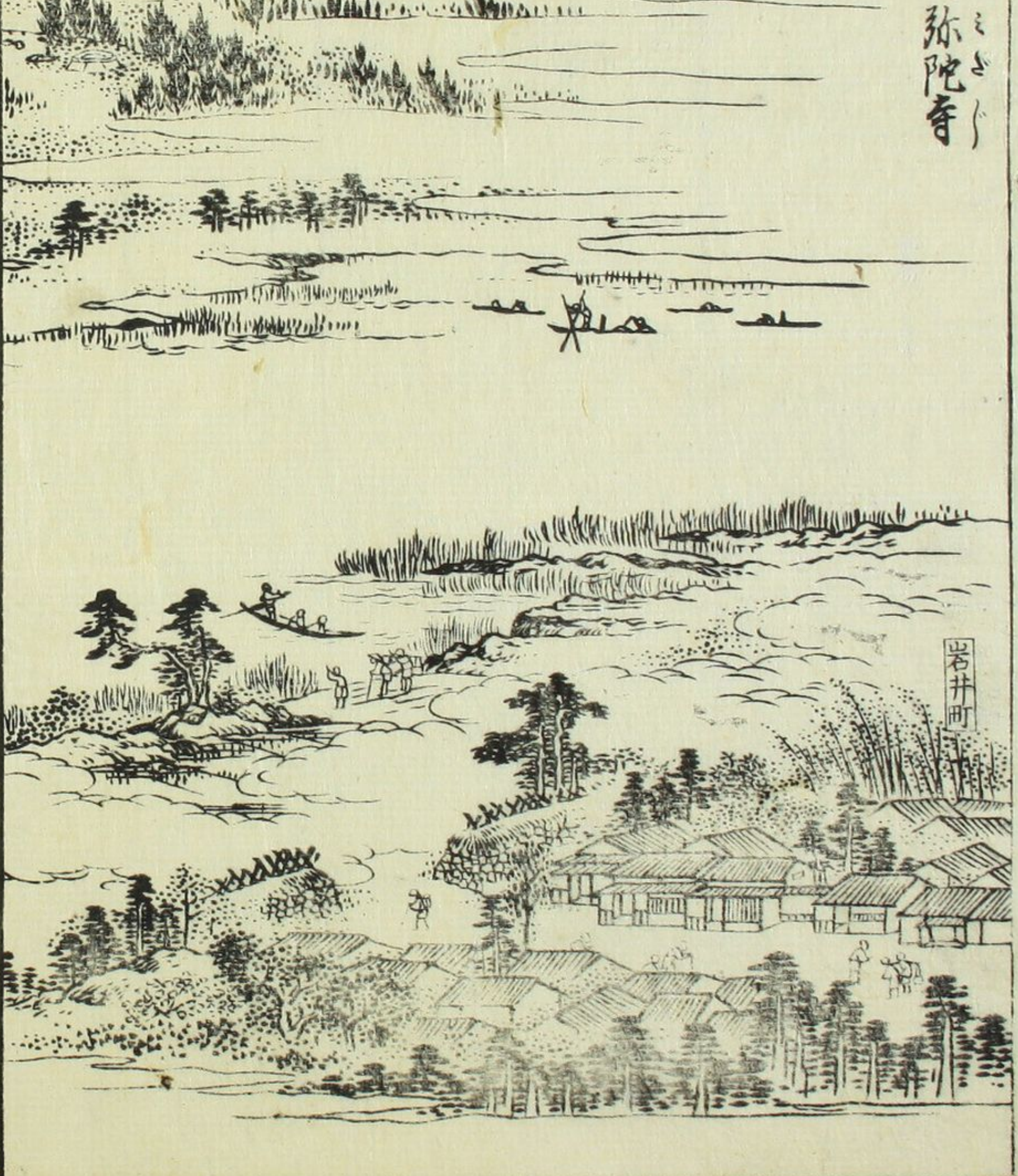




とよら  
糸師の  
大沢廣  
沢の敷  
芝草  
倪雲林  
詩  
御雲汀樹  
曉離  
夕のけ  
まが被  
つさ  
まうけ  
長洲  
長師  
書  
か

長洲阿彌陀寺

長洲と久  
方言  
大方の  
津樹  
渡舟  
又深  
唯の佳  
系  
因  
邦水  
浮  
とて

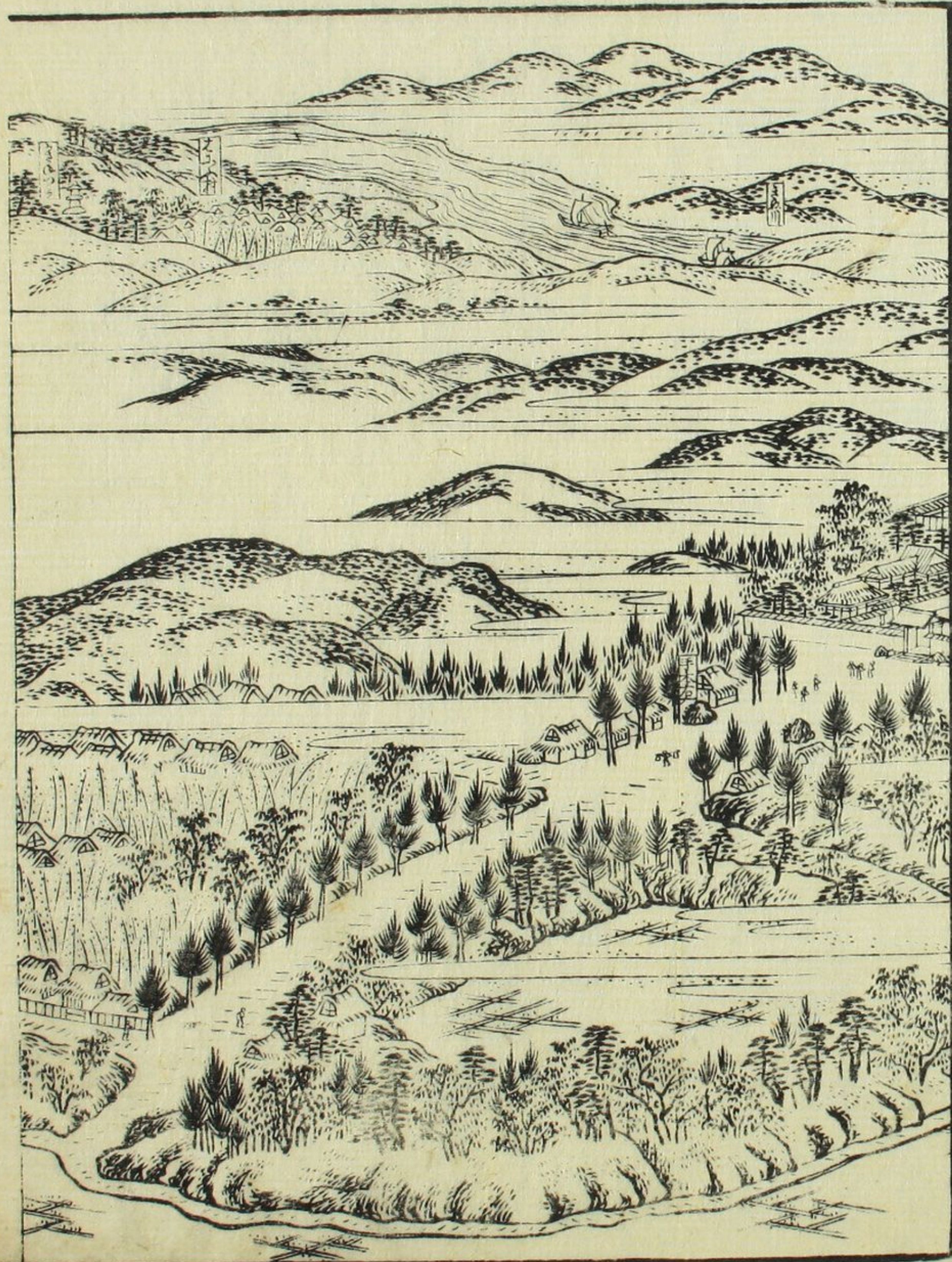


岩井町



後樂山西念寺





横曾根  
見光寺  
聞光寺

当寺(入珍心)又眞法隨喜して御弟子とあり今又まゝ眞宗  
の佛圖とはぬきうろろ○本寺画像の惠心の第六字の名号の  
高祖聖人の御弟子あり○かまの背面樹林の中は聖人  
堂の前の及びあり

極樂山西念寺 本流 日國日郡邊 田村あり

聽衆院と稱は本堂九間に面する阿彌陀如来の運慶の佛を  
子堂に堪美他の聖徳を乃る像を安置し。僧坊二區あり

宗祖聖人の御弟子二十に輩第七野田西念御坊の芳跡あり  
當寺はそ乃るに上宮をなれ奉幸し後入る舊蹟を此に聖徳を

と号して天台宗の靈場なりしが高祖聖人當國移化の由附  
當院の寺務眞證法師聖人の御弟子あり終に

津七眞宗の佛圖とはぬき  
送跡派よ云野田の西念此に奉く化存此に  
眞宗の佛圖とあり其後三世の寺務眞證存元  
後三本に寺と再建せり此寺の元應三年を徳寺大勅進眞證實門山に  
洪禪の銘よも元應三年西念と記せり西念年中寺号を西念寺と改むと云り○西念房のより希編信

州長命寺のト云はく記を信濃の長命寺の西流二十  
に輩第七に列し當寺は本流二十に輩第七に屬せり 什室の聖人眞宗の連座の

撰曾根開光寺 本流 坊舎二區 日國日郡邊 曾根開光寺村あり

開基の性信上人建保二年當山を建立の御教堂九間に面する  
尊阿彌陀佛の春日の作なり又列祖堂は阿彌陀佛の座像上

宮を子の像性信上人の像證智の像を奉安せり 抑當山の右へ  
高龍山報恩寺と号し性信上人教導の靈場なり 即江府法

單乃報恩寺の舊地なりて兼帯の石あり 什室  
には觀音聖人御眞蹟石刻六字名号上宮を子の右像の御

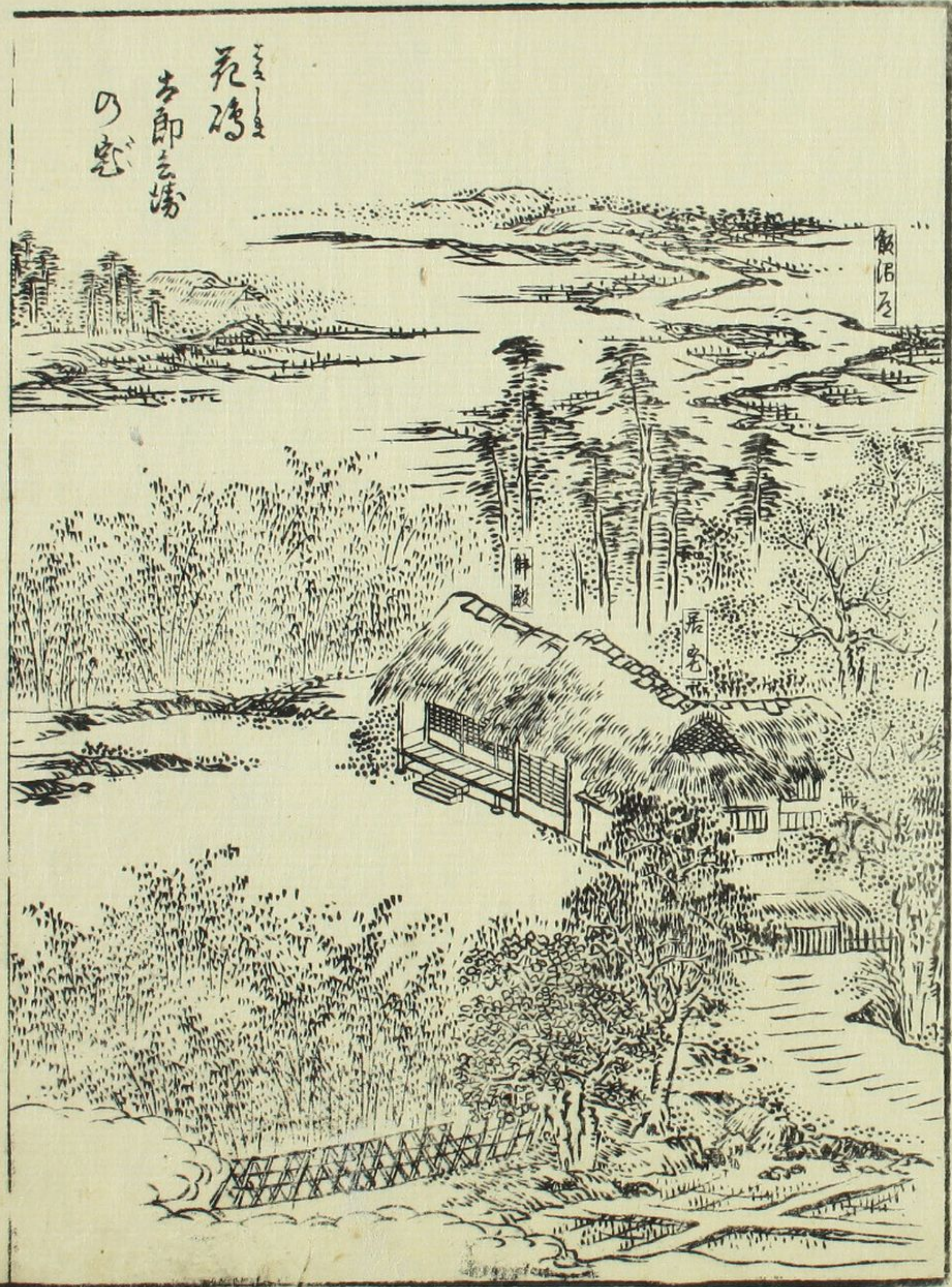
自作なり又性信上人自他の眞像あり 其外  
儀業師の石像の弘法大師の他證智比丘自他の像を安置し

境内の外は不動山と云る山あり 毘盧禪磨が地の不動を奉安せり け山つは  
一より開光寺と云と領せり

○古即兵衛が密願寺より種牛寺へ参り、唯路緒川のやうな花のり  
 石あり聖人自ら他世に参る石の跡に木像を傳来せり代々大房東  
 寺の門後なりとぞ  
 ○相馬の内程跡に石花のり西小後徳郡岩舟と云ふやうなりとぞ  
 ○堀尾のまご塚に緒川のやうな岡田郡羽生村にあり即ち緒川と云ふ  
 まてまをたつがふと命とあせりとも

大生天祿 真言宗 羽郡飯沼

天満宮性信上人の傳依り終るは江戸法草報恩寺の下り  
 委しく記せり 天満宮本地土面觀音菩薩 ○祠のまゝ龍燈の松あり又天満宮  
 出現し終ひ性信上人を拜し終ひし礼拝板の華表あり  
 又あり殊に佛法の威力非徳の炳著たる所感と云ふ此飯沼  
 の池あり報恩寺の下り記しとく例年正月廿池の中は鯉魚  
 と漁り性信上人の所像を供する多し一年も閑ることなり  
 猶も近き享保の比よりや此池のに方より七口の江と掘り池あり

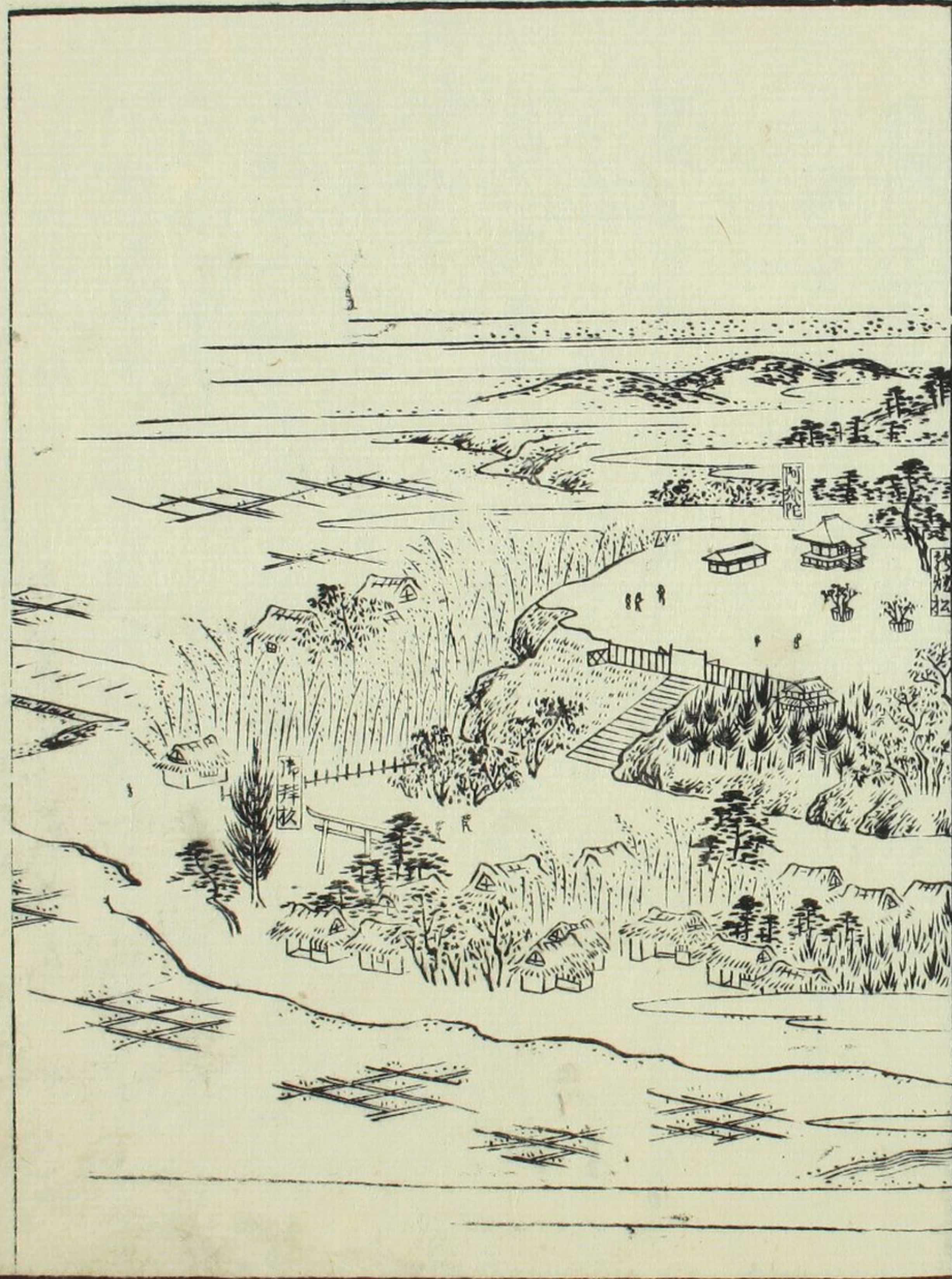


花のり  
 古即云場  
 の感

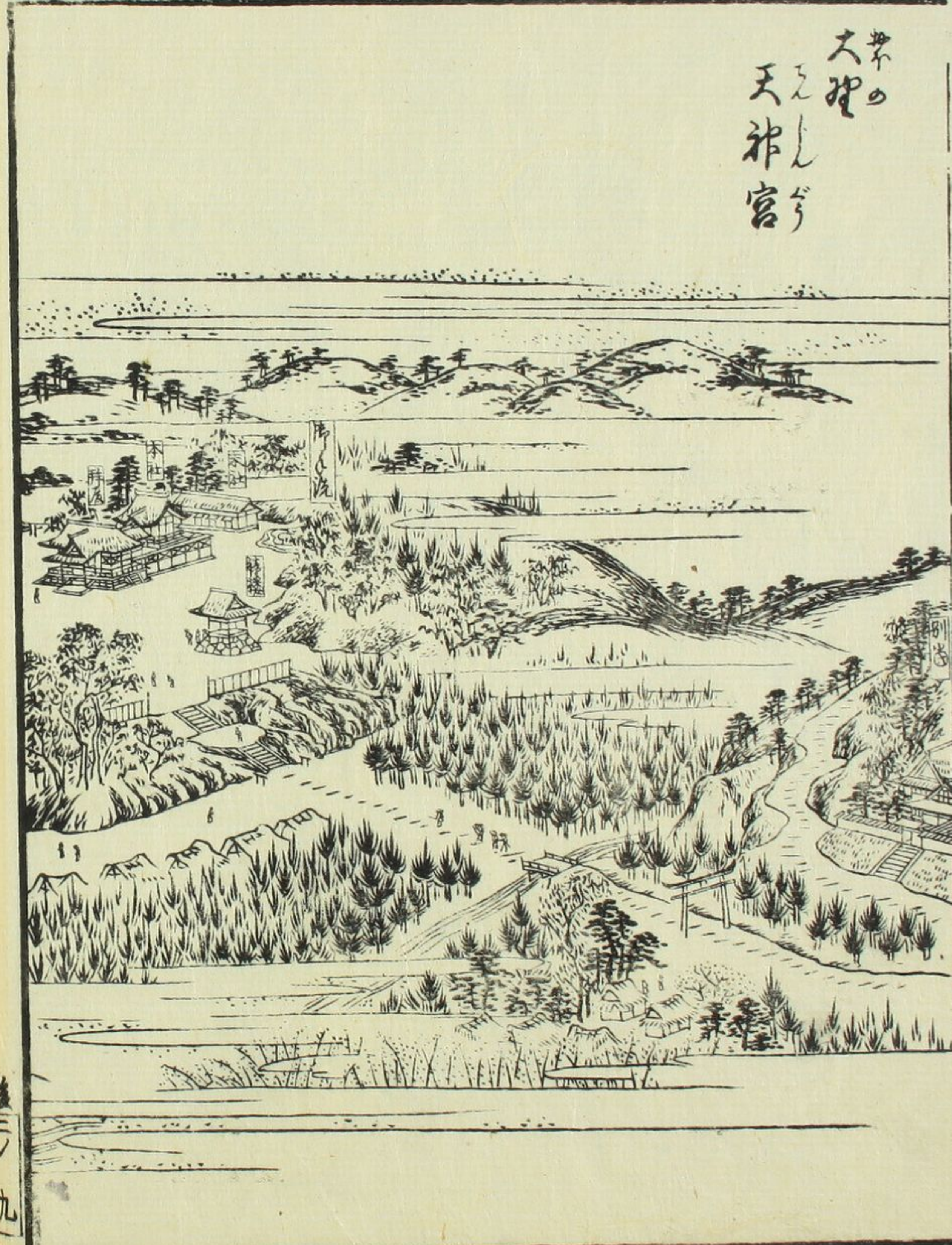
飯沼

神

居



大<sup>衆</sup>の  
天<sup>之</sup>神  
宮



を分らるゝ耕作のたよりと云ふは飯沼の水日毎月毎に  
于瀉とて今に僅なる細江の社殿の下に流ると御洗水と  
の号せりされを流し網と申せは忽二尾の鯉魚と獲て奉  
の供物今に終るゆはと云ふは世に流すも及ぶと云ふも有  
難かりしはと云ふ

雁島之由来

ひう高祖聖人此不幽極と云ふは俗と化極と云ふは  
一と云ふは秋の最中限なき月を泳んとしてりつゝの  
御舟子と伝ふ小舟と掉と飯沼の池水と流びかたは  
一實と今宵一輪として清香いづとの處よりある一  
詩のたまはかくせんといふ興ふく見へせ給ふ聖人の  
御側と若性房の御せりつゝの御舟子と云ふは

池と云ふは嘯くぞに面の平湖月山と満と謂つては唯を  
らくと池中と小舟のいと川ありて殊と風色を増と云ふ  
と仰るふ若性房またふたをてと云ふはと云ふして其  
を歸り給ふと云ふ十六夜の月とゆふをよりといやま  
よう川とく照るそよと云ふは今宵と月見んとを再  
池と云ふは若性房の不思議なるを流し  
廣沼の中と忽と小舟の涌出と云ふは蓬萊麻洲の靈  
島なりんじと御舟子の奇異の思ひ流るはと云ふ  
流遠周防と云ふ者ありけは流の涌出と云ふは風波と云ふ  
人の高德の天地の向と云ふはと云ふは家に飼ふと云ふ  
雁の多一雙を推へて聖人と捧げたり靈島涌出の奇  
瑞を笑しぬ時と聖人との一番は雁を涌出するはと云ふ





高柳の老樹今又残りありて高柳山と稱す

大高山願牛寺 西流 日田倉村あり

當寺の縁起又曰く宗祖親鸞聖人建曆二年の暮秋後國より信濃より尚ゆきて國の東に化導し終るべく下総國より移り終る所高柳國岡田の郡主稻葉伴房身勝重と云へる蓮位房の從弟とありしなり聖人を清く奉りて懇にいたりたりる所若くは終りしりや一度聖人の教化を蒙り信心安得して淨身と云ふ先を一心房と名け終る此一心房奉念佛弘通の所安し一字と造りてんと終る聖人其志と終ひ終ひ遂に坊舎を營み終る一の牛ありて此寺の造立をたしけ式に巨材と運ひ式に大石を脊抄ひ人力を助けたりが既其用度調ふ終り聖人

彼牛の不死いふと見終るは傍をりて飛入て名を一株の

枯木と名化したりと云ふ 此枯木今尚存せり其の長三間許分也其

近多大坂の小林の何れ某寺の僧を寄附してこれに書し終る金の印あり所存なり 其さま老なり牛はてくこころ

一の牛の聖人奇異の思ひをばし終ひ寺院落成の日及ん

て叔こそ願牛寺とは号け終るかして彼寺の一心房(附屬)

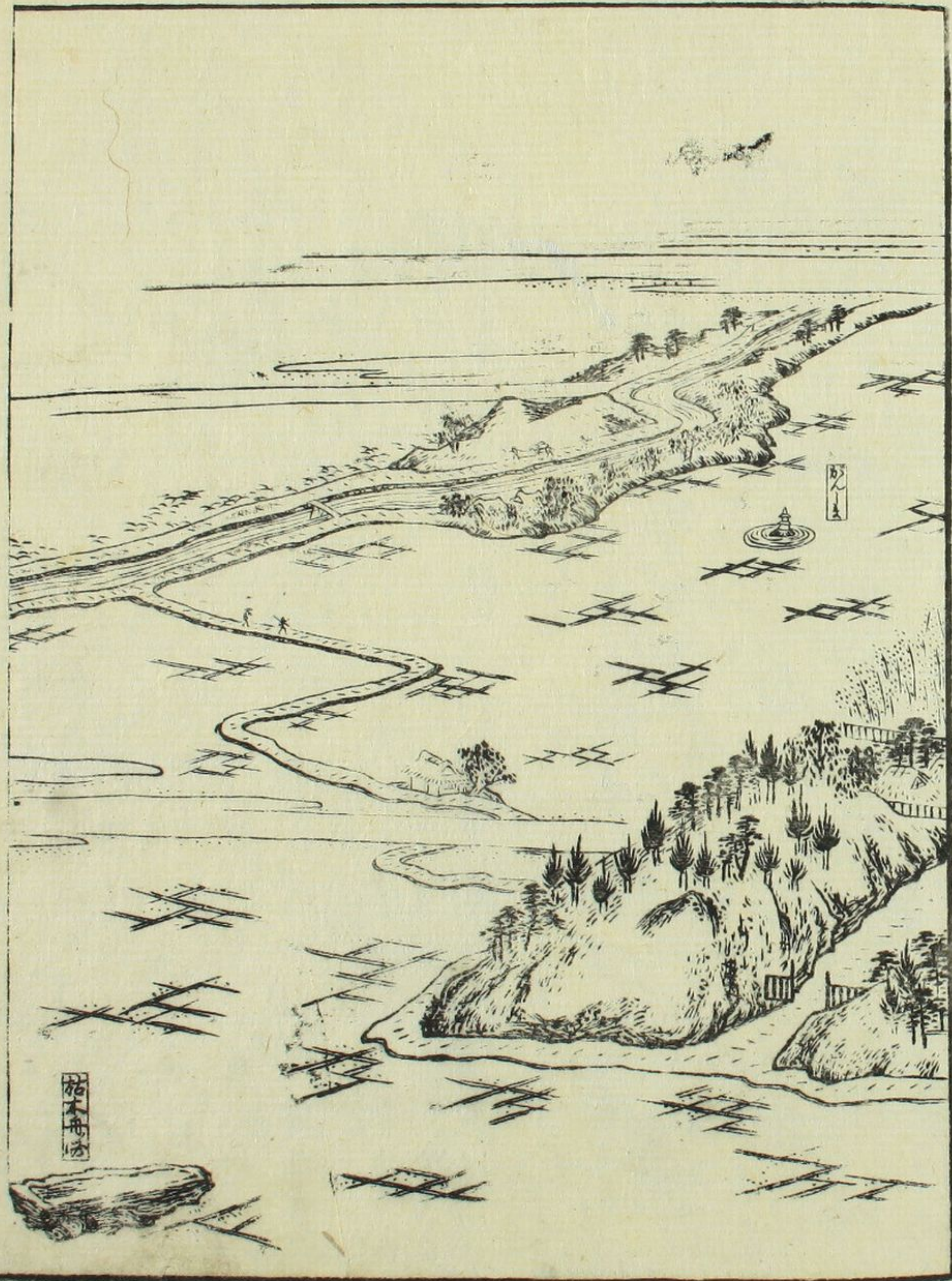
終ひ常州稻田へ移り終る 旧跡は是れ此地に仁治元年の以信房の遺

元文中より一寺を再建して是と云ふ山 終ひ常州稻田へ移り終る 初て龍宮寺を造るありしが中比退治に及ひ

高柳山東弘寺 東流 日田倉村あり

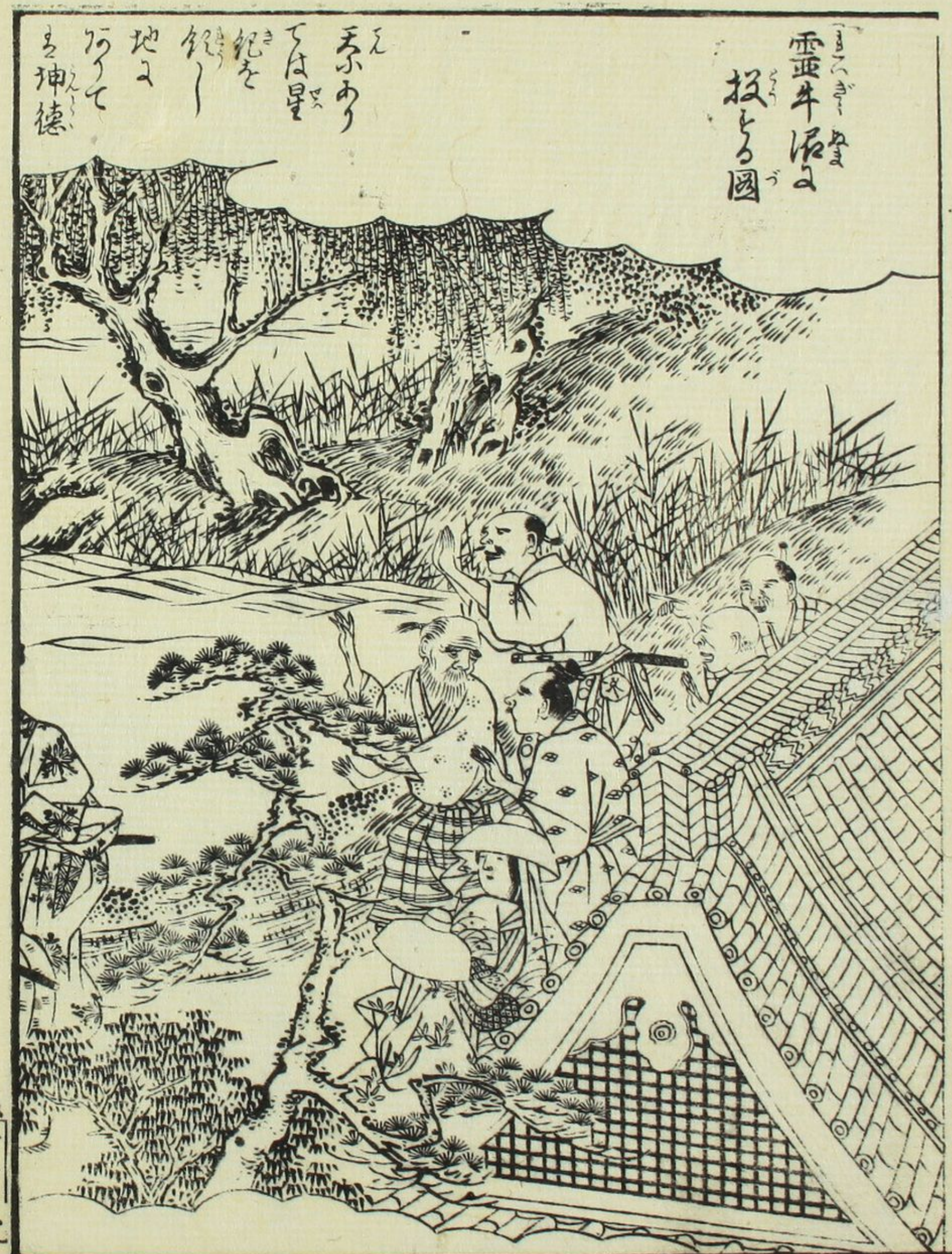
當寺の高祖聖人の淨身は二十四輩の第九飯沼若性淨房の草創なり若性若くは周觀と云ふ時未聖人又值遇し終る此當國は初脚しけるありて國の太守を回に即親活の法を應じ城中又遍面ありて高祖聖人の興法利生を編み





大高山  
頼牛寺  
雁沼  
牛本





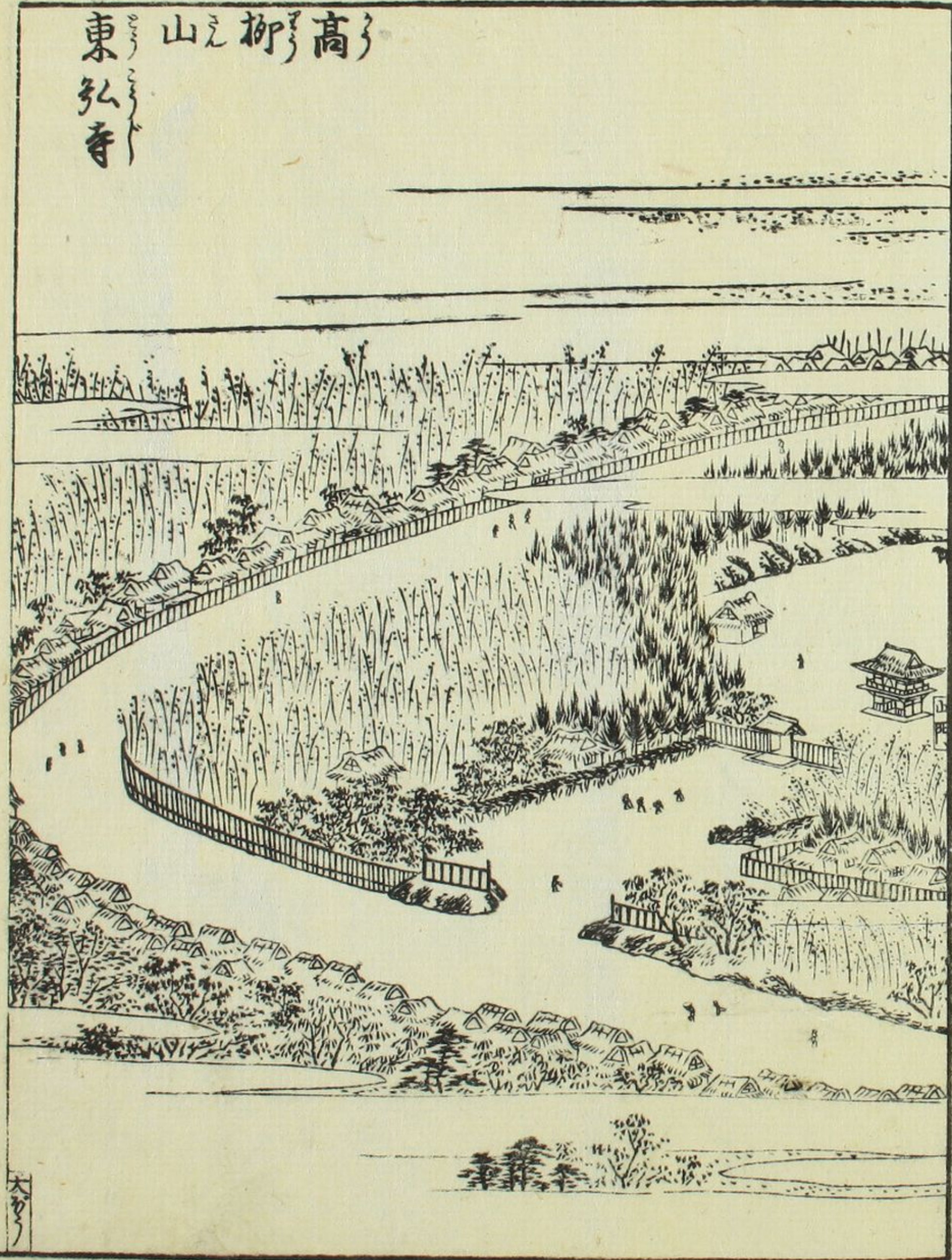
を以て大空即常州福田の請で聖人は渴く聞法隨喜此の  
まじり竟に真宗の門侶となり終に此に於いて聖人法名成信  
性と授け終り吾性即房の字也去りて大守親治なる者  
周親房を拓法せし佛因よりて辱くも高祖聖人を倉  
持村大なる山に屈法しなり專修念佛の行者となりて  
良信と法号賜りり吾性房 周親と終に五二の御弟と  
となりたり時、真應元年良信房が先祖を問ふに桓武天皇  
十八世の孫なりと代々豊田の地を三十三小屋の目より  
せり空へうる武勇の武士なりきと此の時既に高祖聖人  
大高山に於いて化居し終ひしより周親房若性上人河内  
跡の後に退轉せんをうり即一字に佛場と建屋し真宗  
の東方に弘通するの意を以て赤弘寺と号けり安ん真承

元年高祖御治はまはより福田山淨真寺と若性上  
人の壽より終ひがなり若性上人も又この赤弘寺と云て良  
信房の附屬せらるり良信房も寺の二世に任じて若  
性御房の壽像を彫刻し敬恭崇信して専ら遺法を弘通  
ありしに竟に正應二年七月廿五日法臘一百三歳ぬり  
當山に於いて大往生を遂げり其後年を経て寺と此地に  
終ると云宝永の記、宝保の記とも若性房は河内治親の法名なりて建保二年大高山に  
聖人を屈法して御弟子となりて終に終りて此の地に於いて終る  
○靈室に弥陀佛の畫像聖人 令泥十字名号河内 聖徳を  
子真影河内 九右の臣下 六字名号蓮如上人 佛舍利三教 御珠教聖人大  
二人(河内)の御不孝なりしを若性  
二人(河内)の御不孝なりしを若性  
のありあり一皮と見れば七種と消しと云  
信州戸限山江州竹生寺の諸山は此の地なり 天地開闢乃時雨降し秋二枝なり

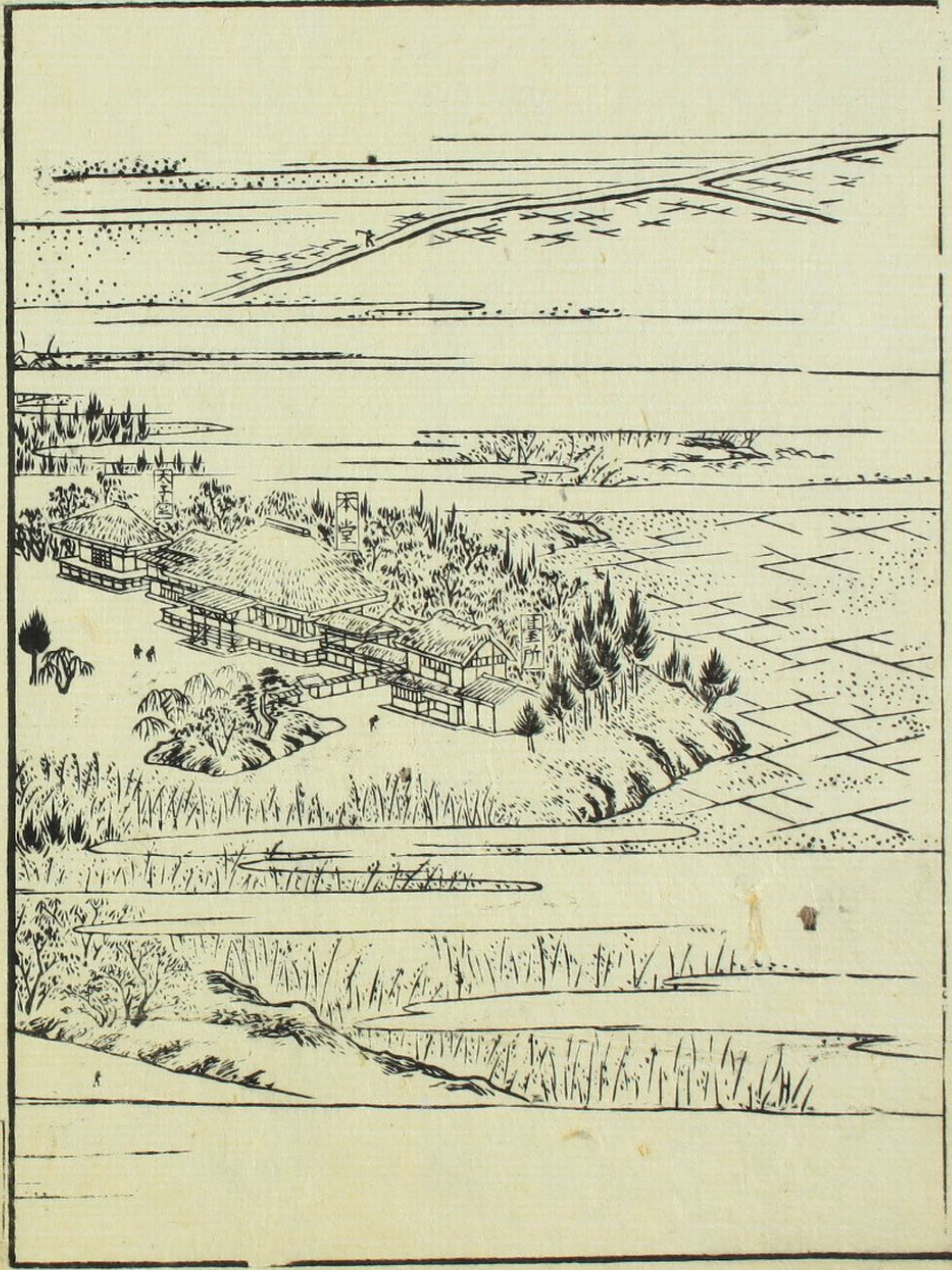
新 堤山弘徳寺 東流

河内國田郡豊田  
の赤弘地村あり

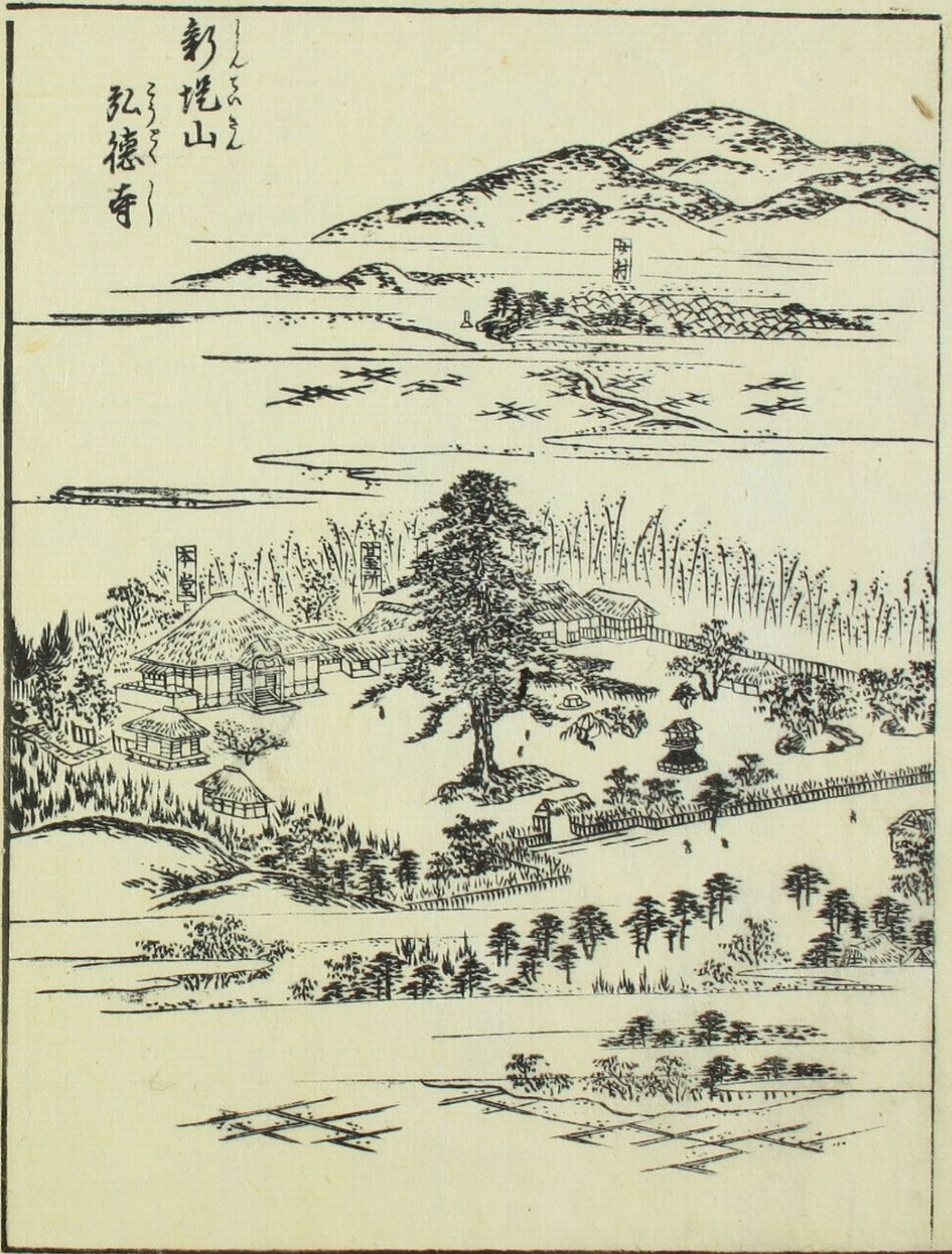
高柳山  
弘寺東



大



七



新地山  
弘徳寺

宗智院と号く高祖聖人の門侶二十四輩第五信樂相馬の  
送跡あり寺家二坊あり

信樂房の信姓を賜りて平次少く桓武天皇の後裔相馬

の門の末孫相馬次郎師常

其叙是念佛形者也稱 結縁緇素集群之 の子相馬左郎義清と云し 氏変たり高祖

聖人面授口訣の真身す即此地一宇と造置し法賜さ

さるる小覺如上人未國桓回し終る形し信樂房未及

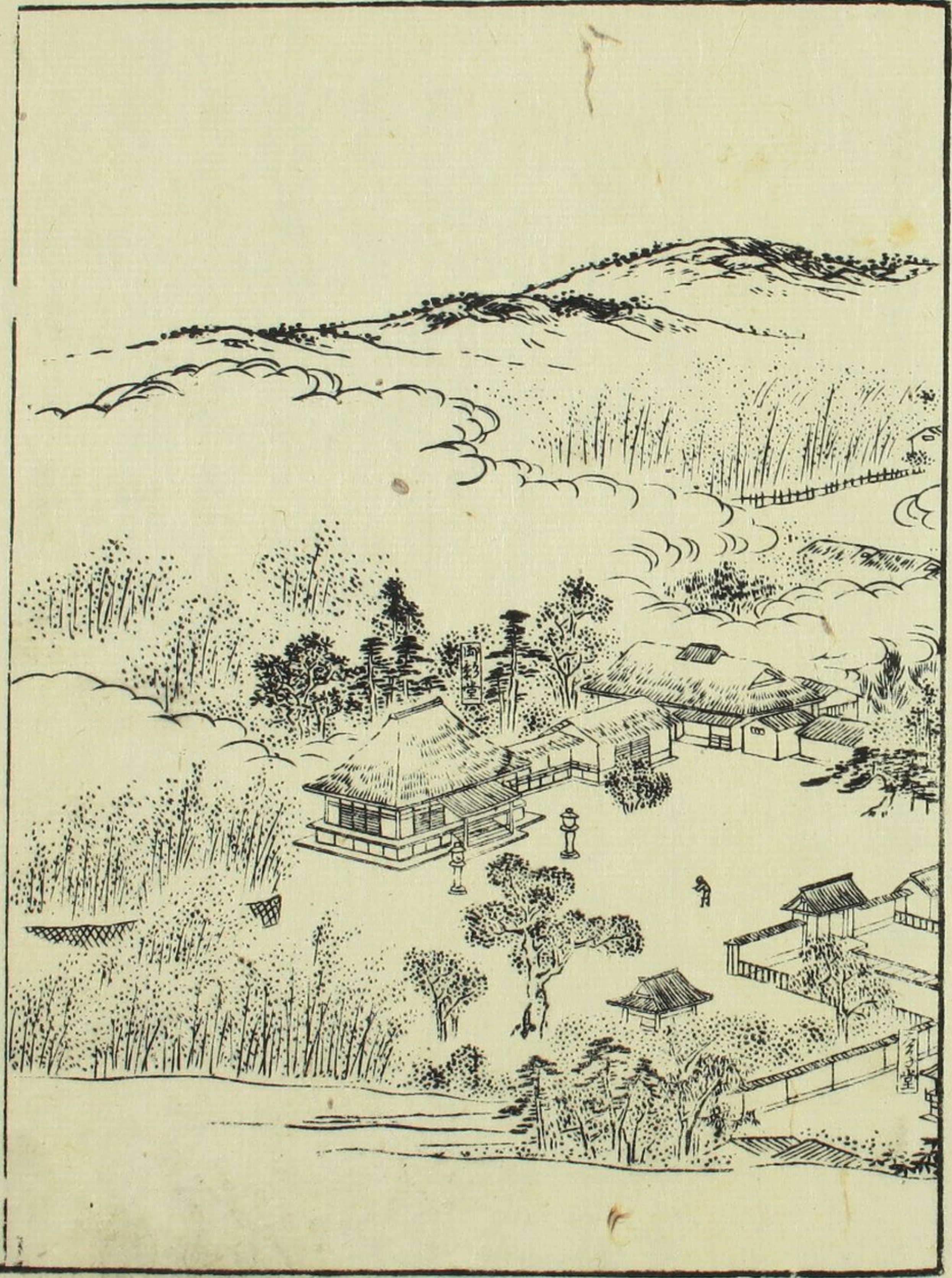
在方りしうい人即これよりせ終ひ悲に法義と論説さ

終ふ其後第八世蓮如上人も又苗坊に寄宿ありせ終ひ

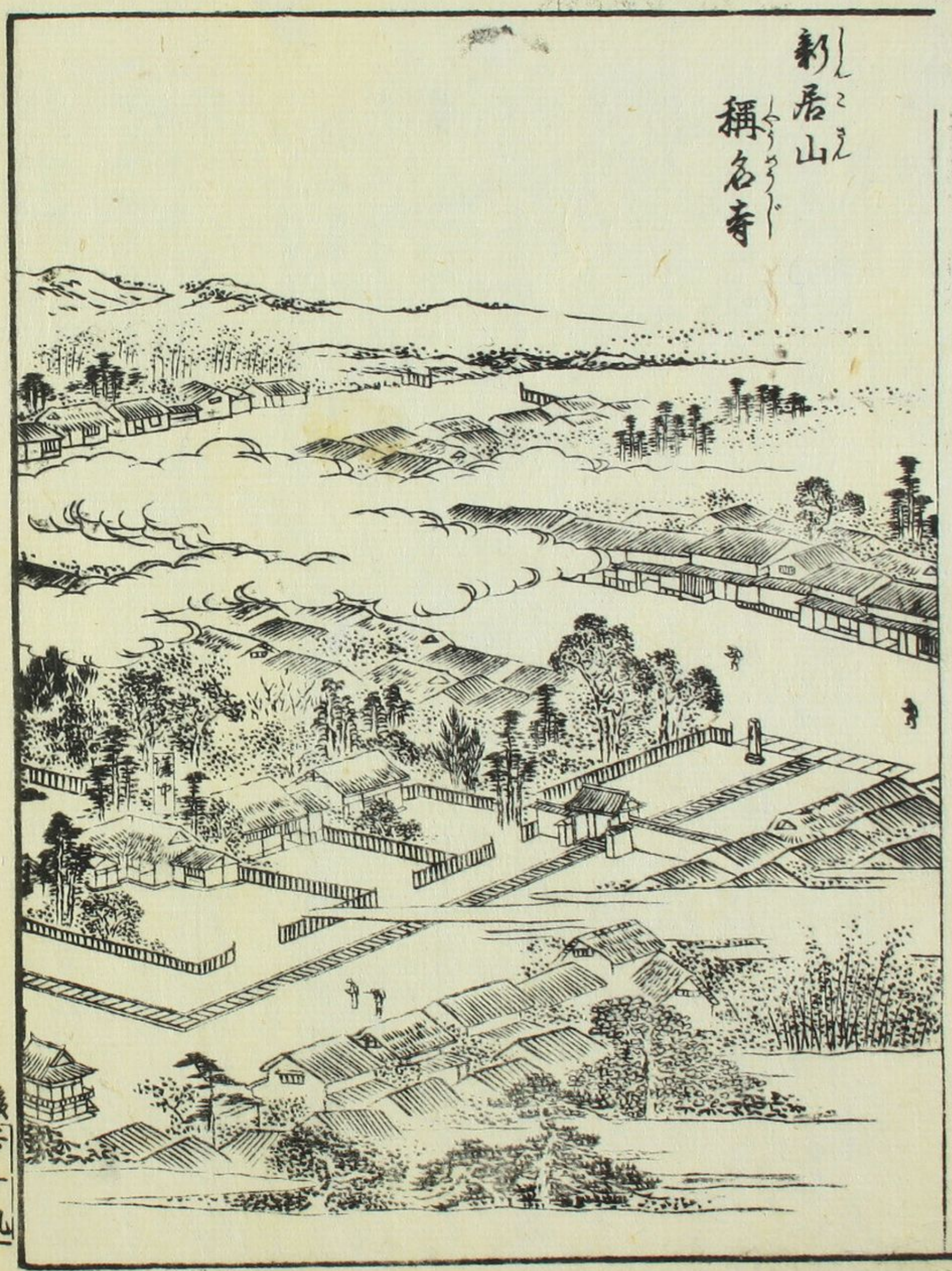
いもろ丸靈場あり ○什室の阿彌陀如来畫像 高祖聖人 御真身

御和漢 淨土の僧 三帖 日内真身御被裏と云づく苗寺中右堂上の御真身

ありきかたうふしは後終ひて終る 此所和漢と云り小次郎あり終る



新居山  
稱名寺



新居山稱名寺 霞

日國後城郡後城 乃瀧下

當寺ハ因東七箇の大寺の隆一ウテ六老僧乃其一之二十四  
輩第二聖人の御直弟真佛御房の用基草創の舊跡也

真佛御房の幸致ハ<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
野國<sup>三</sup>三<sup>田</sup>田<sup>幸</sup>幸<sup>傳</sup>傳<sup>寺</sup>寺<sup>の</sup>の<sup>幸</sup>幸<sup>也</sup>也  
○本堂本尊阿彌陀如來<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
堂 聖徳太子御自他の<sup>三</sup>三<sup>田</sup>田<sup>幸</sup>幸<sup>傳</sup>傳<sup>寺</sup>寺<sup>の</sup>の<sup>幸</sup>幸<sup>也</sup>也  
九寸余類ハ仁和寺是助法親王の<sup>三</sup>三<sup>田</sup>田<sup>幸</sup>幸<sup>傳</sup>傳<sup>寺</sup>寺<sup>の</sup>の<sup>幸</sup>幸<sup>也</sup>也

像 此尊像ハ<sup>三</sup>三<sup>田</sup>田<sup>幸</sup>幸<sup>傳</sup>傳<sup>寺</sup>寺<sup>の</sup>の<sup>幸</sup>幸<sup>也</sup>也  
精舎の本尊般若世親菩薩<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
殿佛の結縁を<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
巧を以て月輪入道兼實公の御息女玉日の御方と示現

一<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
御方ハ<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
以勅免と<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

真佛御房の檀越結城七郎朝光<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
さまを<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
る玉岡<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
聖人<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
又聖人<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
尚も吾妻<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
六十<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
終<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
誠<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
其後<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

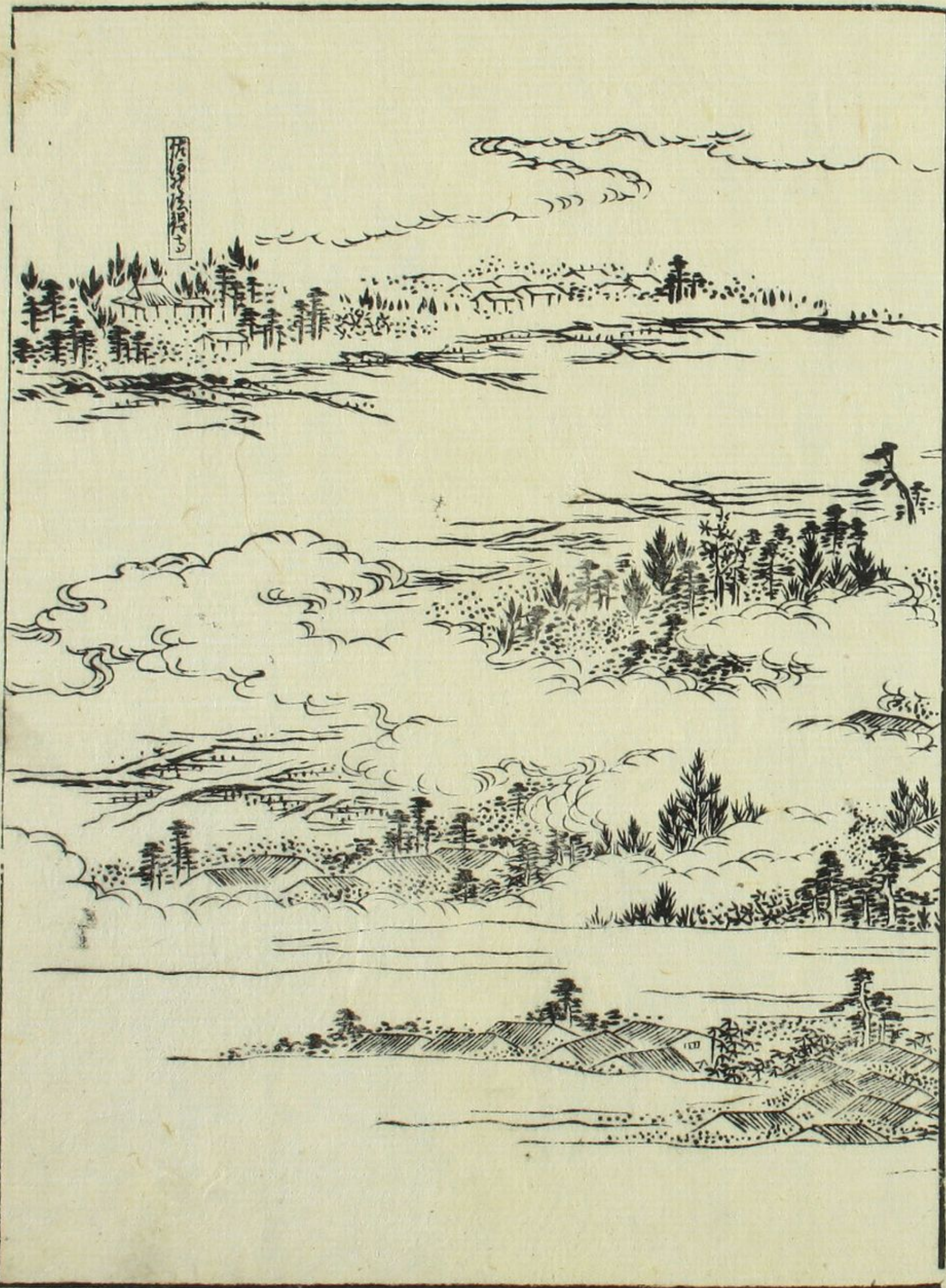
其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子

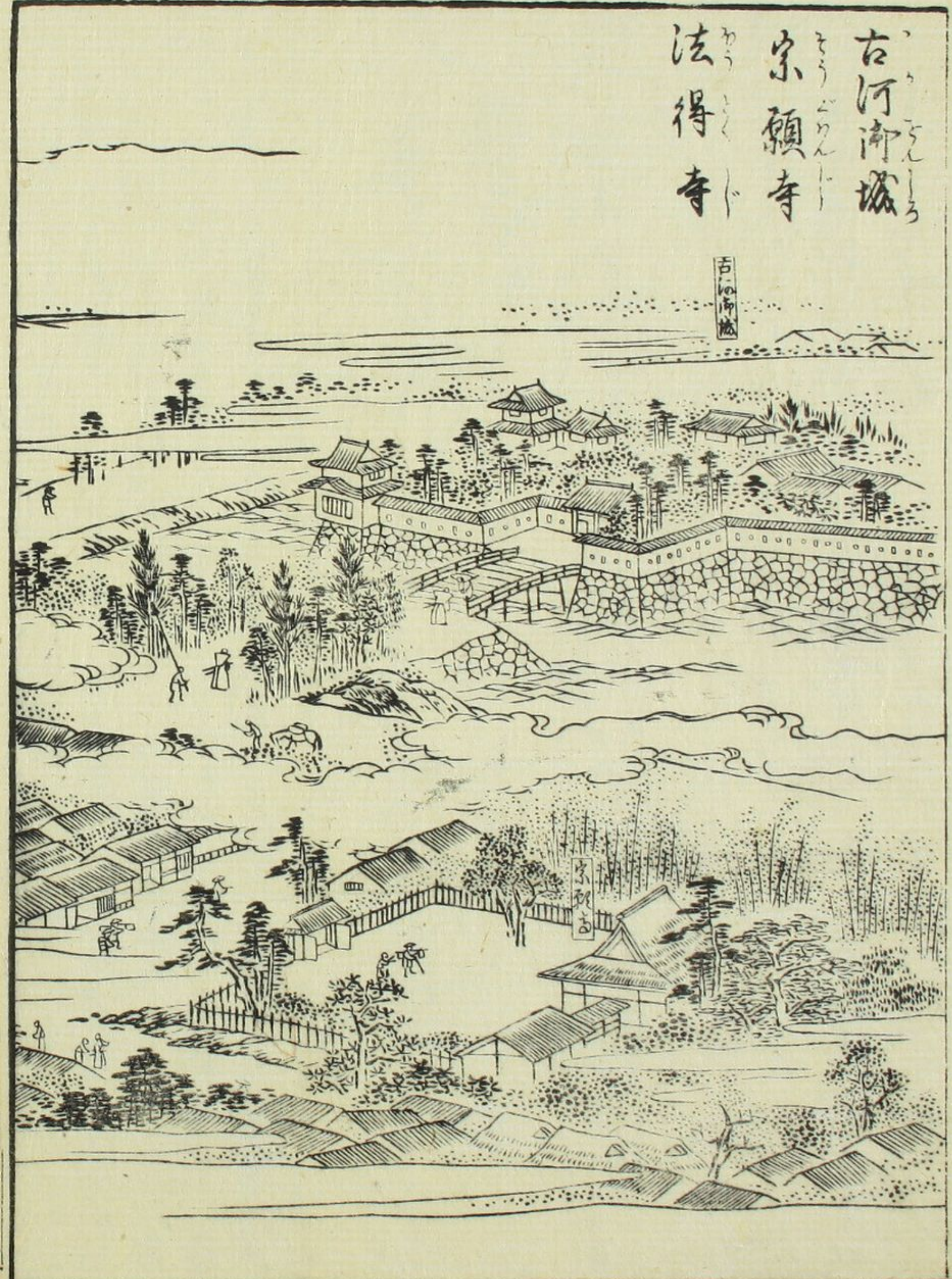
其後下野國神村といへる石<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
嘗<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子  
坊<sup>長三</sup>長三<sup>余</sup>余<sup>春日</sup>春日<sup>他</sup>他<sup>子</sup>子







古河津城  
宗願寺  
法得寺



せしより中田の御房と申し方より尚寺ハ慶長年中の  
建立とぞ 西念御房の俗姓傳記を看篇信州布野長命寺の東下に出せり西念御房の遠祖と云ふ信州布野長命寺西下総邊田村西念寺流江州八幡堂寺佛光尚寺と合せ  
○什宝高祖聖人に十五歳御本像 聖人御直傳御附屬の本像といふ  
周より石津園寺流古河より碓那の間に水海村正光寺流ともにも祖  
重人御由緒の地なりとも

然る高山勝願寺 東流 日那碓那 村より

順性院と号し関東七箇靈寺の其一なり高祖聖人上足の

門身飯沼若性御房叙建の芳趾なり 若性房の俗姓を言し関東七箇靈寺の事不出せり

本堂九間に面する阿彌陀佛 聖徳天皇 御直傳 坊舎三區あり

用基若性上人秘り大高山东弘寺と草創ありし後又當寺と

造立ししと明性房又附屬 明性房の真佛 上人の御房也 自ら稱回津貞さ

へ將領ありしが津光寺兵火のため又回縁せしむる再い

尚寺より移り幾行なく信州長沼に堂宇と再建し後誠後

高田より移せり即歡喜山津貞寺といふなり尚寺の相承

と関山若性御房二世明性房三世順性房 順性房ハ順信御房の真

佛圖再興し三世の御房 佛圖再興し三世の御房 後碓那より移りて 二世若忠五世如慶六世教

順 壯年の後誠後より 凡かくれく相續せり ○什宝聖人御自画あり

向の御教とあり其餘宝物とれを畧と

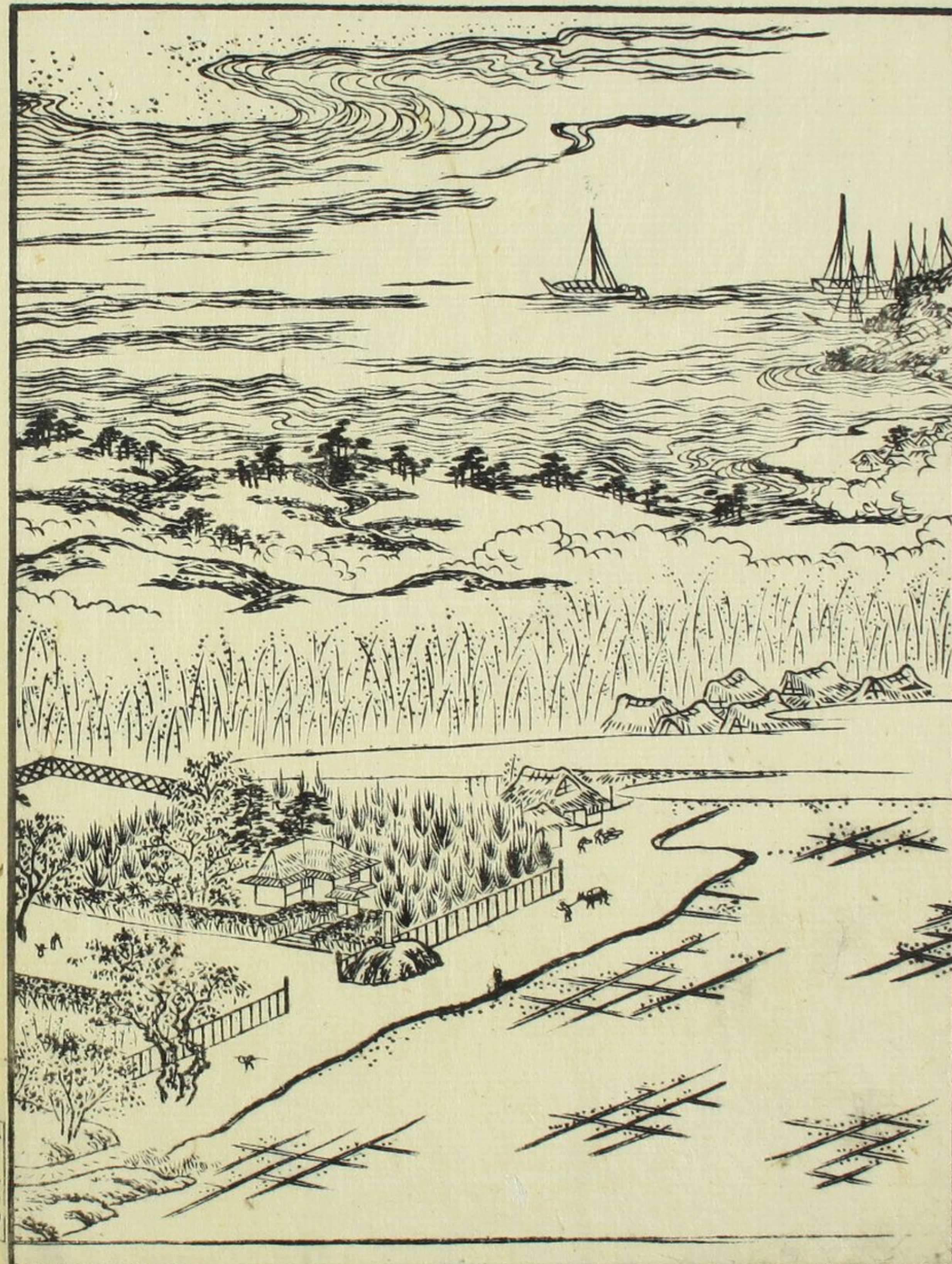
坂本より川利根川の別名にして坂本第一の大河をいふ人字にてかくりつなり水源は上野園沼田より出野武死下総三國の諸流相合して隅田川と云ひて海に入

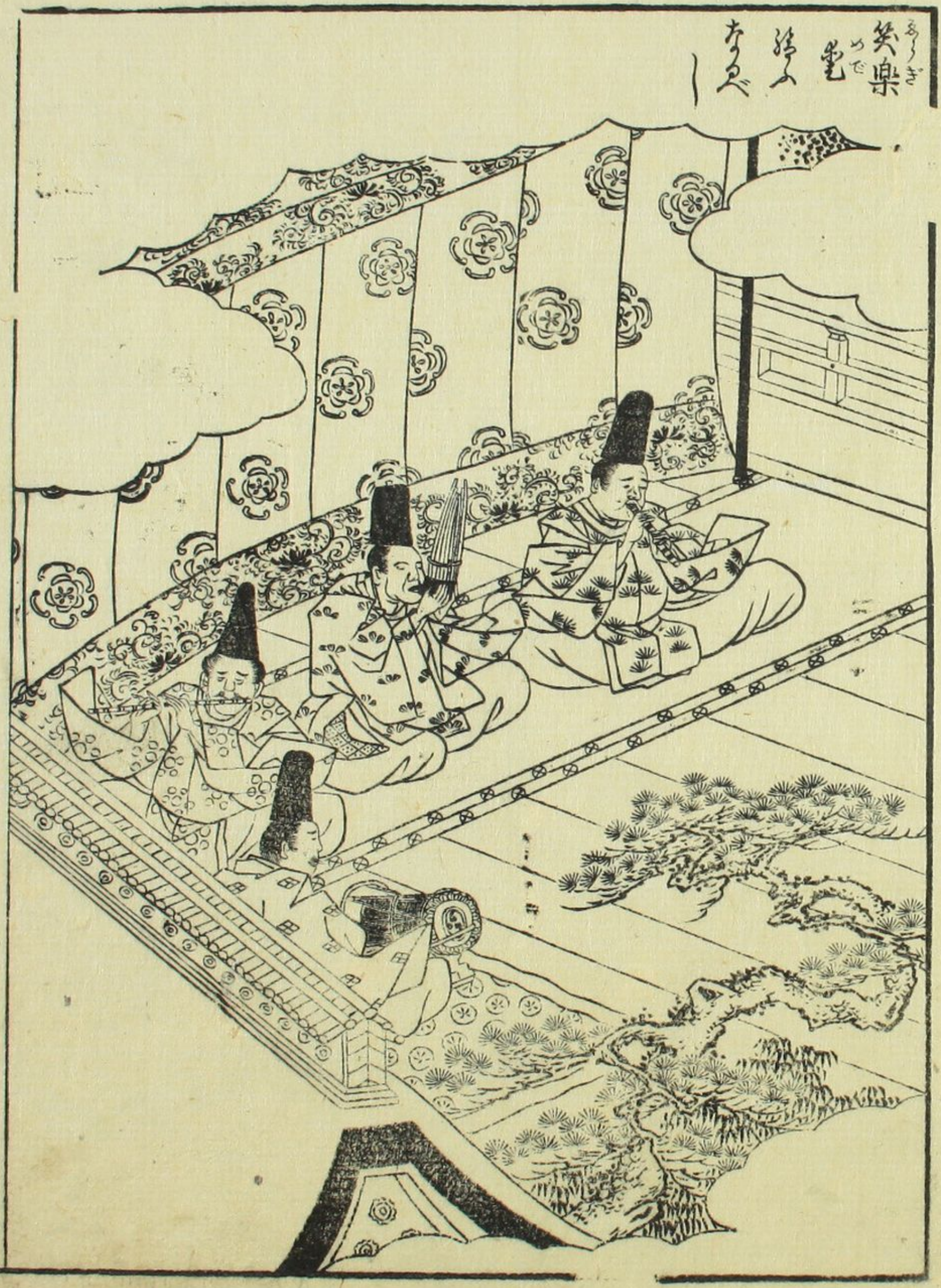
高柳山光了寺 東流 日那中田より

當寺旧天台宗とて武州より柳乃郷に在てる柳寺と号せしが

往昔建保の以高祖聖人御經圓の初尚寺に入御ありしは

寺務貞悦法師聖人の化益を蒙り圓法踊躍のあまり御房



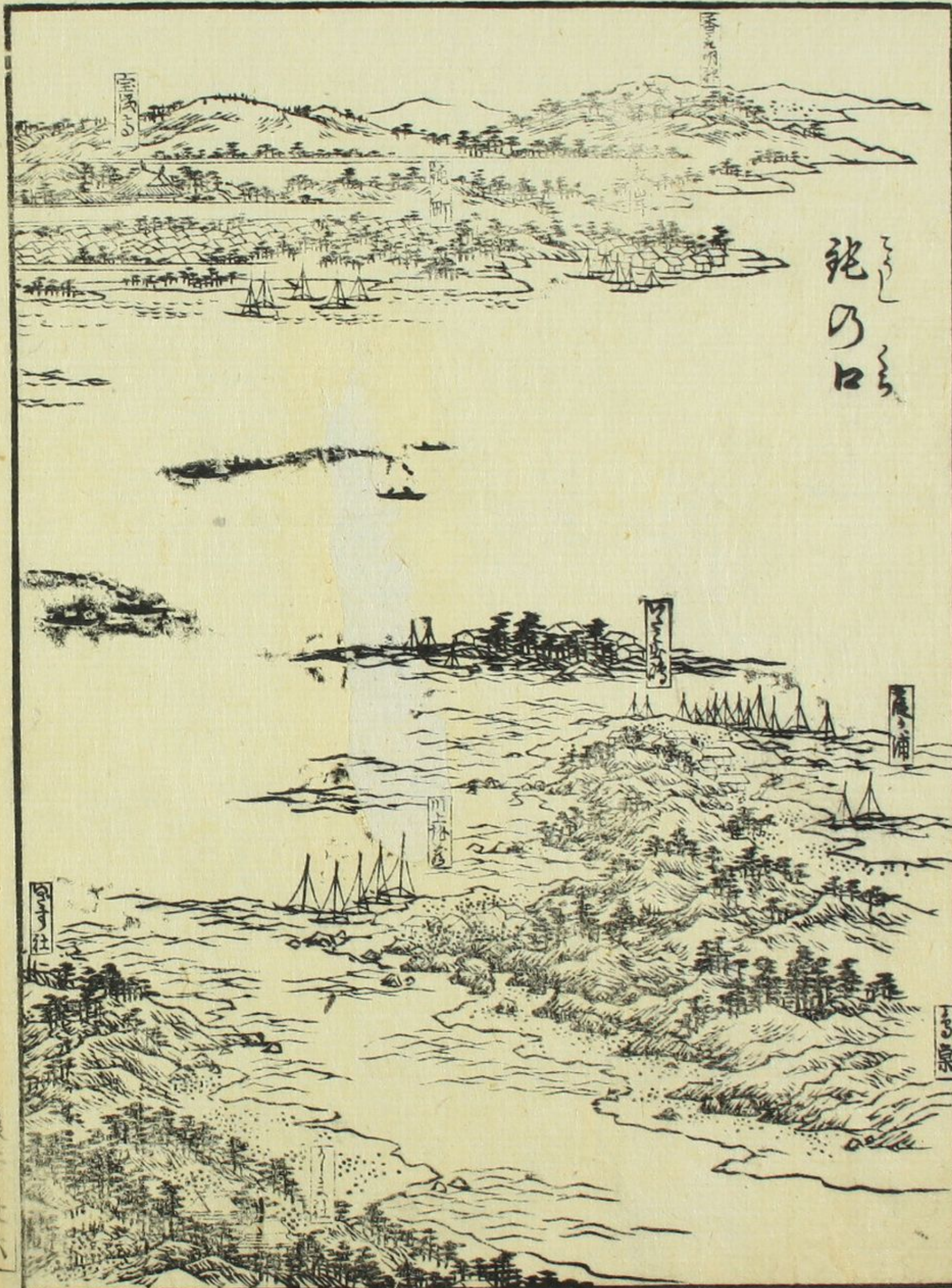
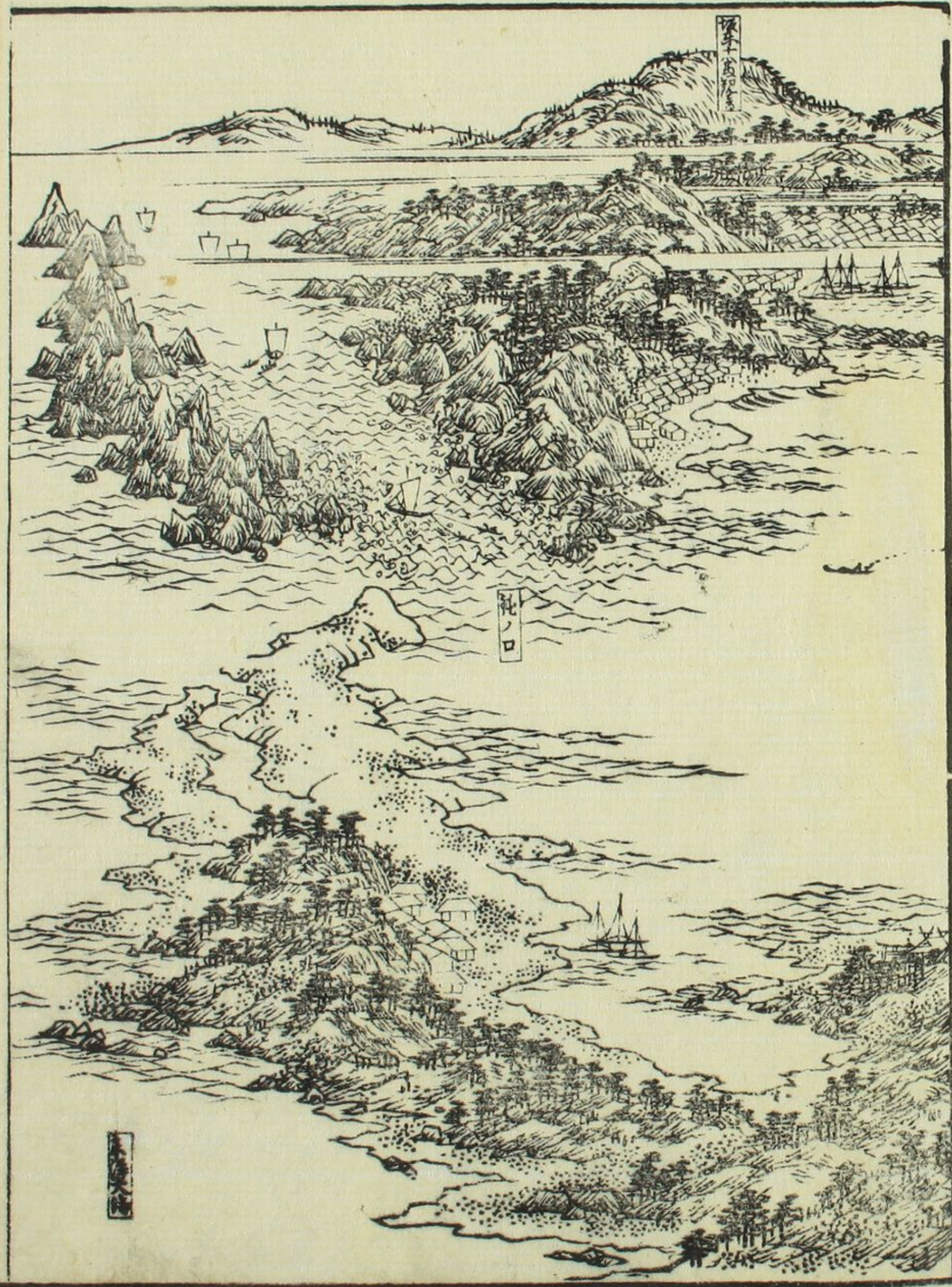


笑樂  
ついで  
筆  
清人  
なる



舞妓静児  
奏舞曲図

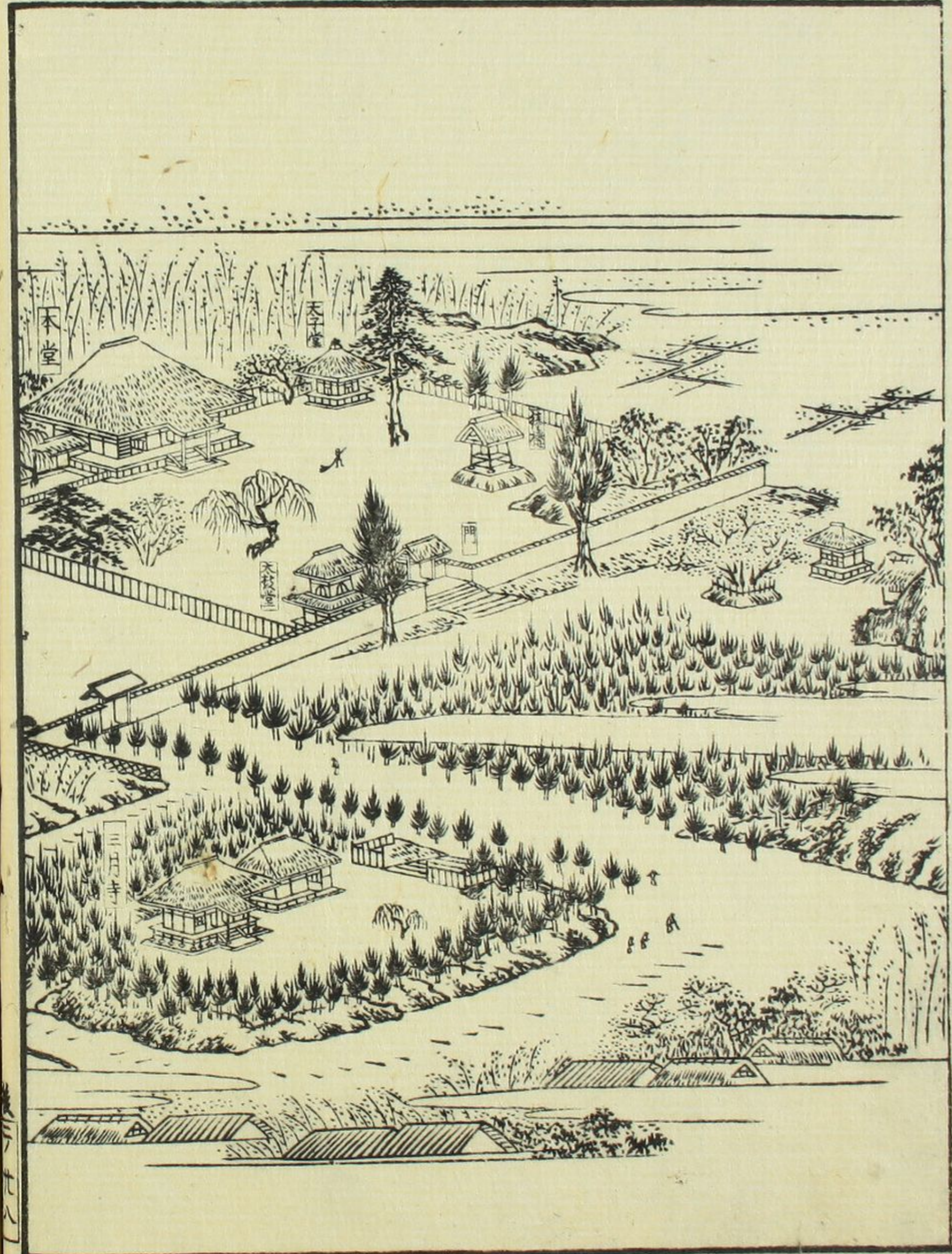
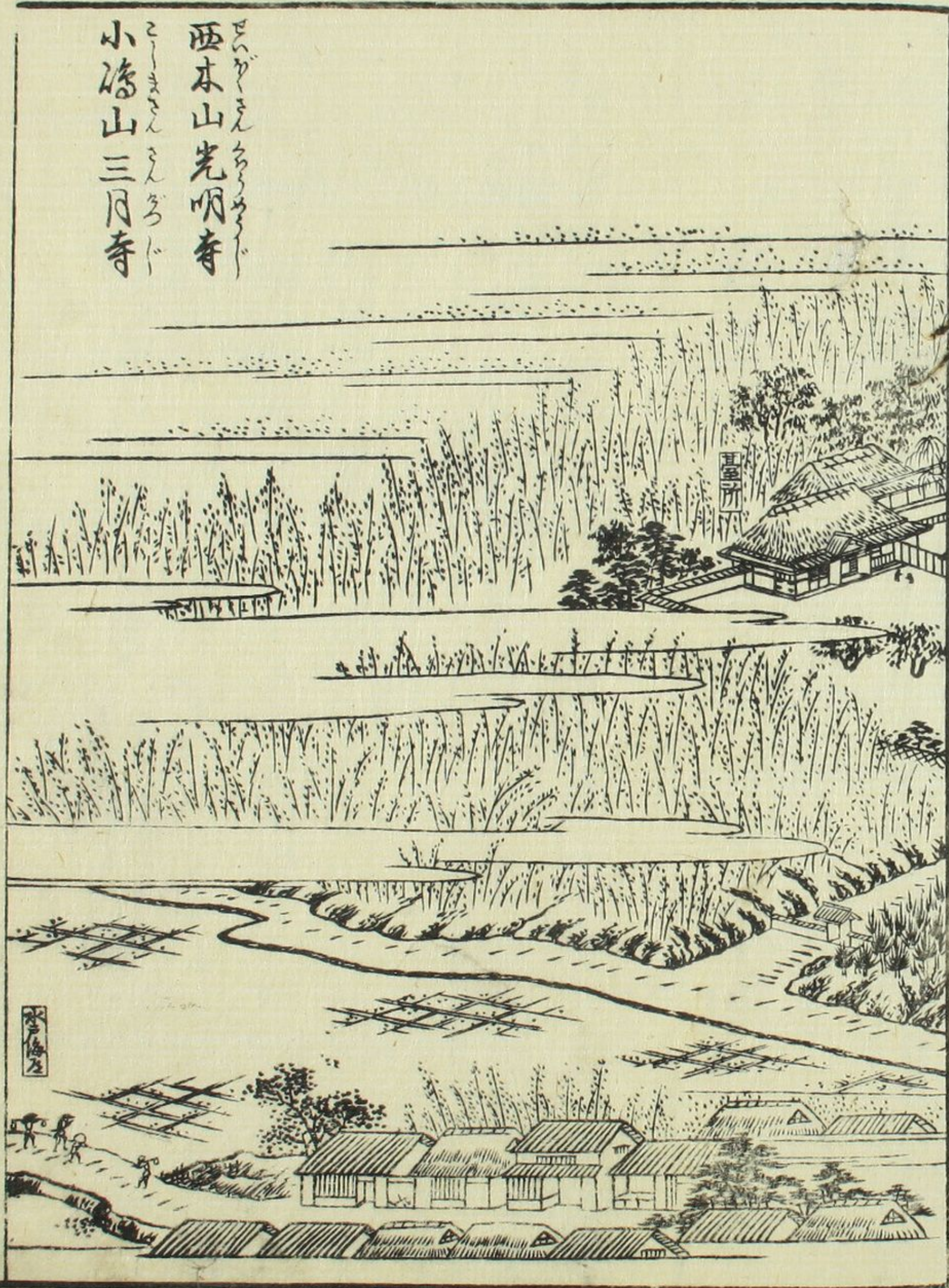
静児の  
まごやう  
立舞  
細女乃  
かつた  
うらな  
かの小町が  
御象苑  
御膳  
いへるより  
天保



花ノ口



西本山光明寺  
小浜山三月寺



基うて聖人法慈と汲け給ひし石此靈場なり○本堂九間二面

本尊阿彌陀如来 本阿彌 用基堂 明徳法師の 坊舎二區あり

抑明室房の俗姓と号す小檀武天皇の後裔三浦平吉即の繼 奥州武

の息三浦元義繼の嫡男曰久女義明 治承に五月廿七日

の人の子曰次郎義澄 正治二年正月廿三日 の男平六兵衛尉義村 後五後

泰村三男小吉郎兵衛尉朝村三男三浦三郎光村に男又吉郎元信門尉氏村五男に即元信

門尉家村六男五郎元信門尉實村七男六郎元信門尉長村八男 あは九男駿河八郎元

七郎元信門尉重村九男八郎元信門尉胤村十男平六義繼也 あは九男駿河八郎元

信門尉胤村方り延暦年中兄弟を軍家と既述して其家久

繁榮し殊に時りきさるが室治元年其の以嫡男若狭守泰村

謀及よより一族終に滅せり此胤村を奥州に在るるが

これよしをばより世の換り心憂く一門嚴凌消滅のため出家して

ありたるを小山判官長村なるに擲捕せしが 東渡曰室治元年六月廿

者在奥州一族滅亡之に遂出家之上 のちまゝ 後免て上洛し高祖聖人又

渴しなり曰く又佛法の利益淺くは歎喜 みえんじ

て門侶より列んを教ひしうは法名成明室と号けたまひ師

弟の御賢海く遂に聖人又降し當國よりしが弘法乃基

趾と用んた先此下妻村と号ひし一字を建立し即乞を先

明寺とぞ号しり承治二年丁酉二月十三日法臘七十三

して終に當寺と号ひし寂と多 室承の元室保の元と明室房の

名号九字六字等 聖人 菩提樹 境内あり聖人遺小舎三月寺と造置

乃世を承ぐんとするを信しかりり 其後明室所房を人の信をうけて此地より向ふ

御向跡の標をんことをしり 於樹 其府の款は我れ又と給ふつる職科と樹

この光明寺を建てるありしと云 其外畧々



小幡三月寺

東流 光明寺境  
内あり

當院の住持建保二年仲春の以宗祖聖人小幡郡司武弘が  
 法を應じ此地より下の山に移り法を弘く其の基を固き禪房  
 を設けて法論所とせしむるに五年二月まで奉教念佛と  
 弘め給ひて靈地あり然るに聖人當院の御直身釋蓮位蓮位  
住持  
は係三住入る教の末孫兵衛政宗重とく而不居後一多は建保七年一月右馬政政茂講  
 叙と企て家重同妻の河法をわたりしは終に彌平脱と刑罰を不せらるるに至る人先  
 とふく憐れ思ひて命とを法法にせしめ罪に免助と賜りて承り承りて承り承り  
 せしむる法多法蓮位と賜ひしより聖人は當院住持をさうして純一五二の後承りし  
 或は蓮後房の源三住持政の息孫受守仲綱とて二月法獄の初聖人助命を後ひて  
 御承りしは法を弘くしむるを考ふに時聖人御承りしは法を弘くしむるを考ふに時  
 國より下向ありしより曾て交符は建保御承りしは法を弘くしむるを考ふに時  
 一系は信徳やよむるに重人九代乃に奉後御承りしは法を弘くしむるを考ふに時  
 漢を弘くしむるに其氣眼を寄よむるに重人九代乃に奉後御承りしは法を弘くしむるを考ふに時  
 乃に信徳は信徳と傳へるるに重人九代乃に奉後御承りしは法を弘くしむるを考ふに時  
 寺に傳へし純ら教ありける其後蓮位と法の初小幡丹後入  
 道長下又附屬ありしより法信房長下れ子孫世にお續して寺

勢よりしは中右妻歿す及び蓮位光明寺の境内移す

三月寺舊地

光明寺より三丁新地村へ移るるに

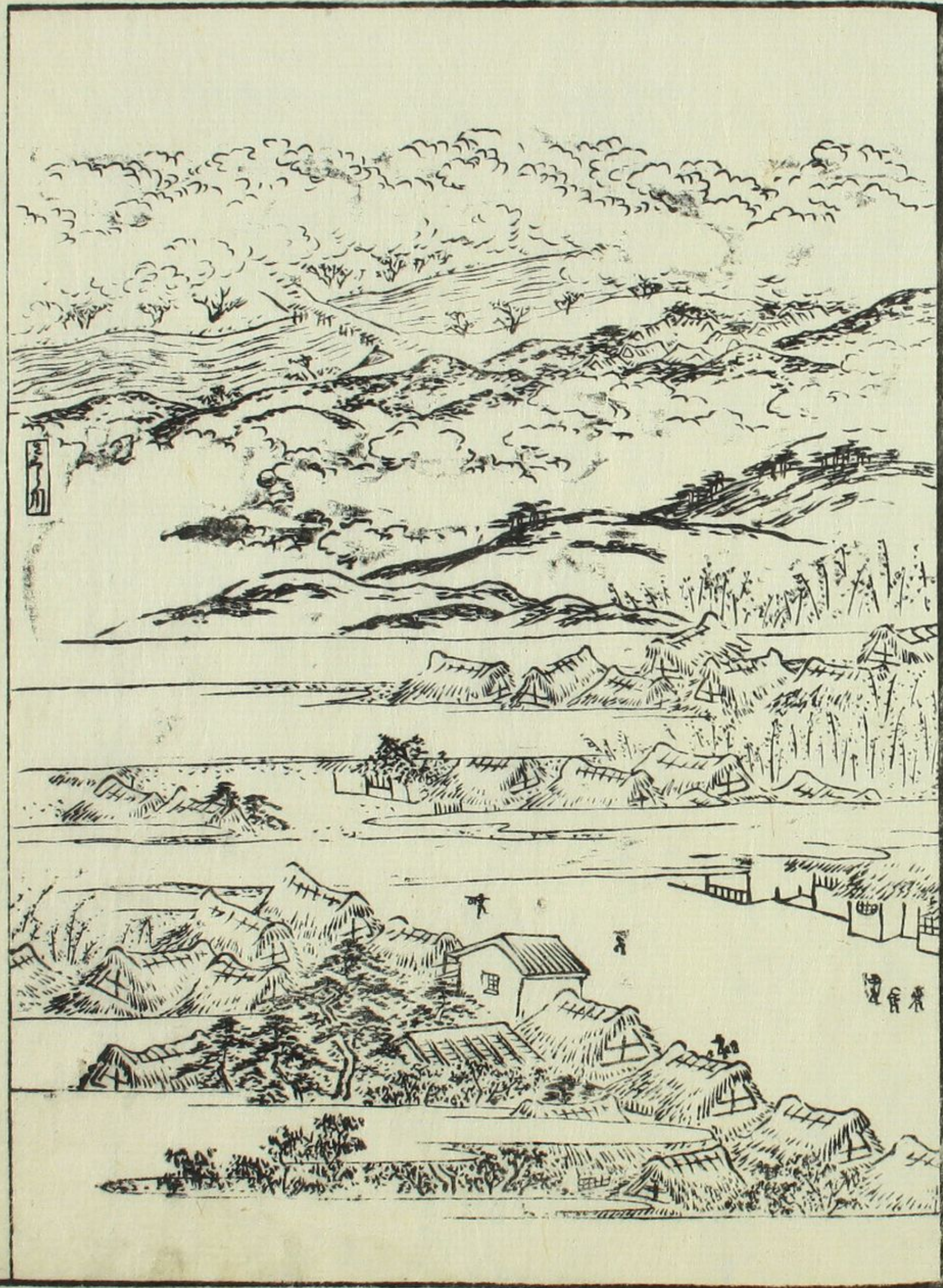
往昔聖人三月寺を建立し田地より方三十間許り面より北と築  
 中に聖人よりして極長き二平あり  
古三國餘の大樹なりこの地  
 聖人の田地なりを記す

佛名山常福寺

東流 日國新治郡大  
 曾根村あり

玉川院と号し聖人の上足二十日策第十八八回入信房  
唯一の遺跡あり ○奉堂御本尊安阿弥  
の佛

八回入信御房より四國那河郡久慈の西八回郷の領  
 家より七回五郎知朝と号し累世武勇に家にして殊に知朝  
 當時より世に其誓は隠すは然るに知朝宿因の深慮は  
 天孫善提の志に形する奉たりと高祖聖人猶原



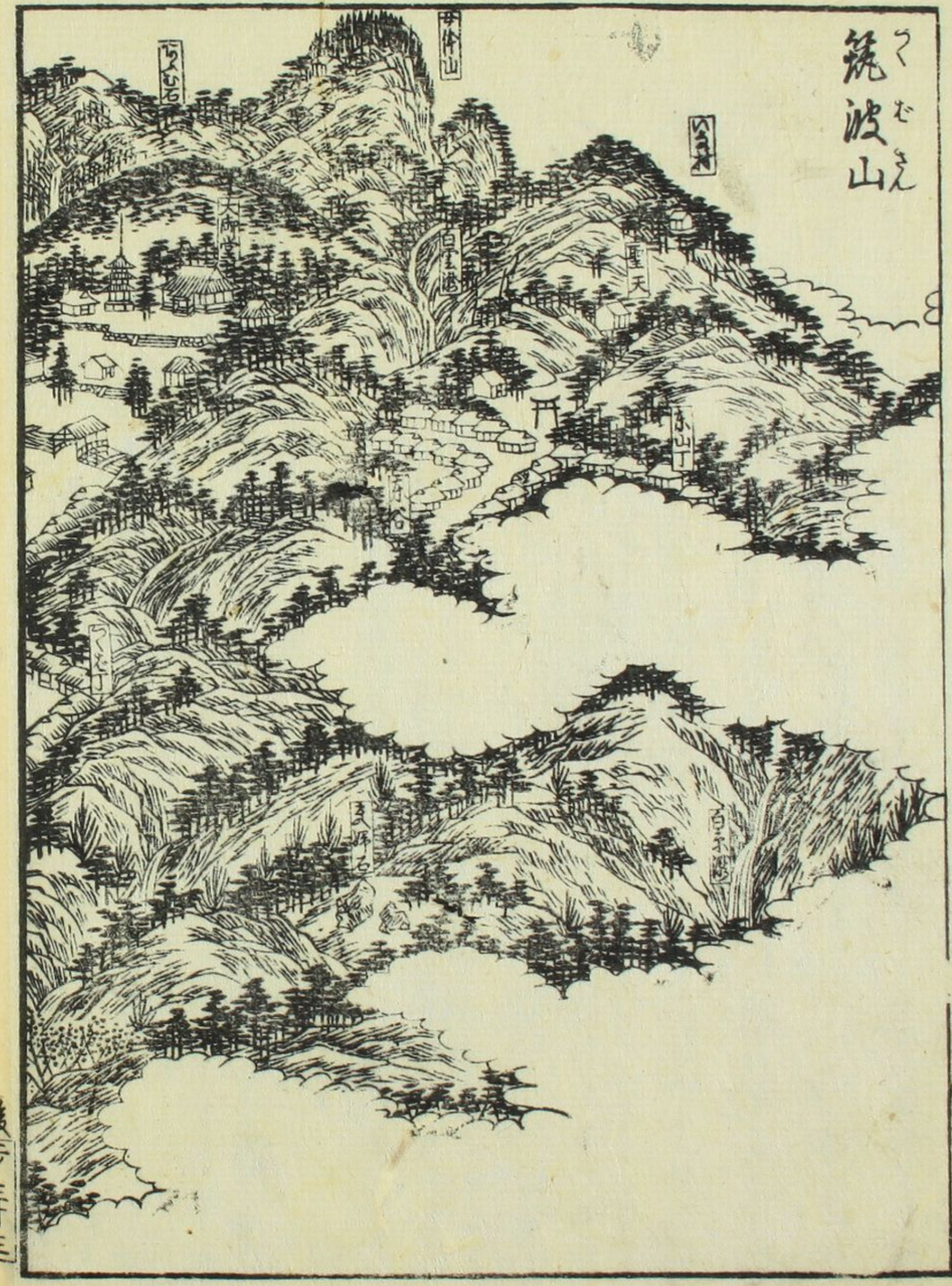
大門の御街徑回まはせしは変は廻向て拜偈を湯  
仰の思ひ深し即出離の要路を問なりしは聖人  
殊に専修念佛の奥秘を懇勸授与し給ひしは  
知朝立石に聞法法喜して師資の物とすしるふを聖  
人即入信と法名を号け給ふかくて入信房まかのが屋  
敷と廢毀し名を一字に佛圖と名し八田津後寺とそ  
号し其後聖人亦之洛の砌入信房河とを慕ひ  
登せしが塔さく尾州日は押運若寺と抄ひて聖人は値遇  
なり恰も嬰子の母をばうらぐてく教の限りなりしは  
奉入福祀と終に彼寺と抄ひて往生と遂なりしは  
三月は運若寺の寺勢入信房の厚信をみて死を聖人  
と湯せし奇特と感嘆し即其本像と彫刻し永く寺中

筑波山大御堂

日國新治郡筑波山筑波町にあり

と妻長にまゝ靈堂念佛往生三國傳末師資相承浄教の  
世に歎ひしき要室なり聖人亦真宗とて中は六字名号とては善寺源信法光三師  
の教文高振は法光上人及び聖人の所教を畫圖し後人其後如信上人と稱し  
後ひて其の教を傳へし其の教を畫き給ひしは其後如  
上人其の教を傳へし其の教を畫き給ひしは其後如  
是よりして師資相承の所教を畫き給ひしは其後如  
相承の所教とす

乃用基を名宗なりしが弘仁年中弘法大師結界  
大御堂の抄りて檢視の記をよみ給ふに弘法大師の像を彫刻し給ふに今  
本堂に其の像と名を靈像とせんなり板本三十三の二つて并二十八番の札をかりて本堂の  
南面より十尺間に方ありてより以来密宗と名し給ふに密院と名し  
聖人亦真宗十字名号を傳授せり畧記に云聖人  
出國輪田に亦淨苗に抄りて筑波權現堂中は示現し給ふ  
のまきりなりしは此に抄りて聖人亦登山まはせしは



くろ  
とら  
る  
月  
と  
ま  
や  
に



西  
の  
人  
の  
女  
体  
權  
現  
以  
鄙  
曲  
著  
話

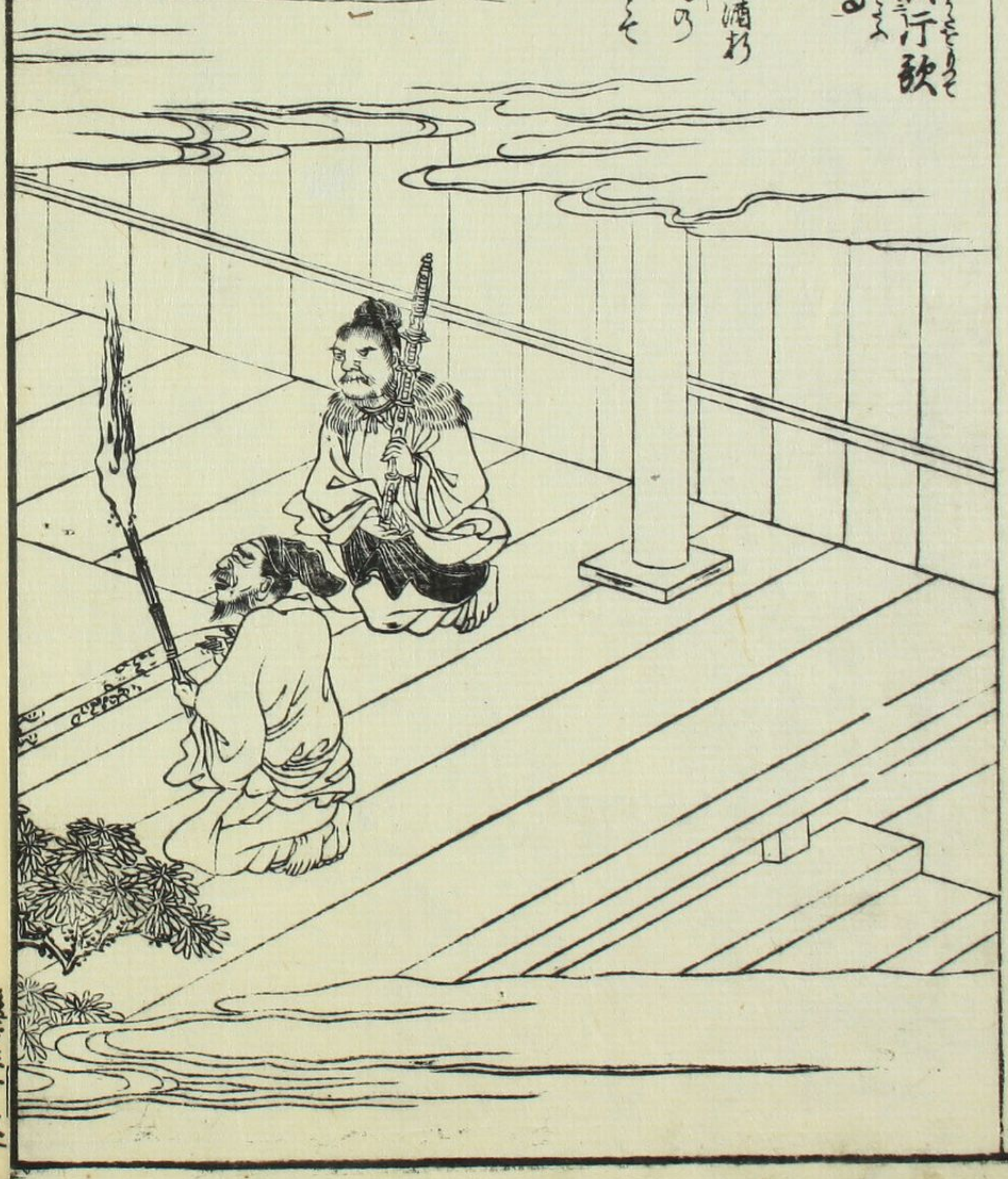
西  
の  
人  
の  
女  
を  
知  
り  
し  
る  
拾  
遺  
集  
に  
忠  
忍  
が  
歌

あ  
ま  
の  
い  
づ  
れ  
け  
つ  
の  
あ  
ま  
の  
ま  
め

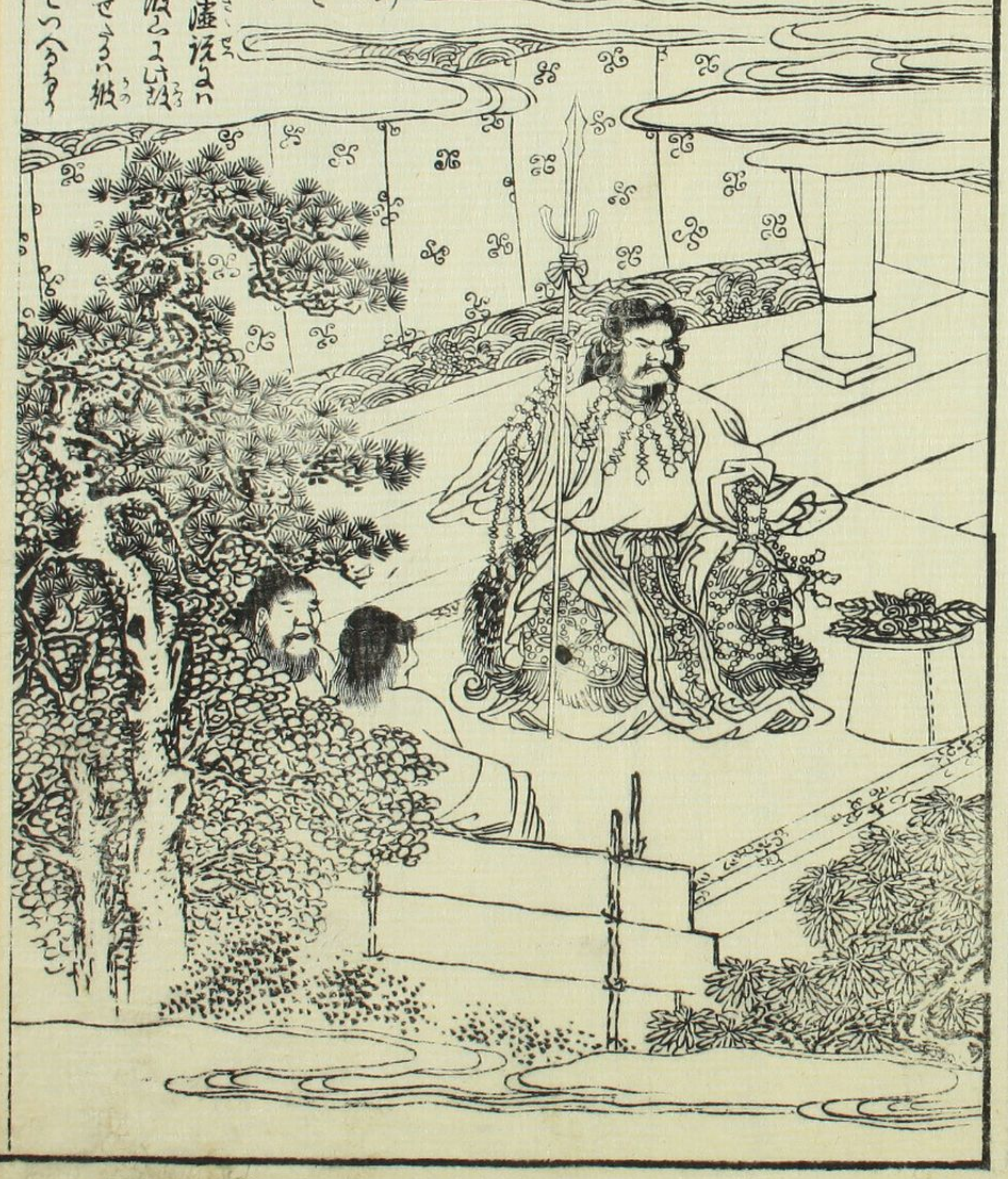


兼燭翁以行歌  
若日本年

と兼田斐國酒坊  
宮より兼燭の  
海の遠ありとそ  
源衣のてん  
のいと九経  
着て幅中の  
ぶれた物を  
既載ける  
國と家して  
あり好むの  
まそをとう  
と各一吾邦  
の上代いと  
て版九経



よてゆま  
つるい  
漆るる  
脱甲斐  
名勝志に  
け縁の載  
るを名  
べ一被言  
日本を  
赤征一  
附沖映倭  
比貴命の  
終る輝袋  
をうて外  
こでり  
此に扱け  
みと  
行詠



權現既よ半復まぐ下山ありてさうぐく其来儀を勞ひ

人権現又湯く流ひく始りたぐひを情を通へて流く二首の  
権現の御願をよみて筆を深流く不とぞ其外什物聖

河秋多あり 二首もよ

○物茂郷が曰はくはとれたる青嶋とる人流波山と松とよ合はれし  
常盤の橋によまろひを常盤と書し此山よりつてこひしら  
りて日高見の詠合せりなりびくも此の及切きき流してら  
るめりてかたはる東海と運流して此山乃其藤又及び一  
元春高山のれはとてとてゆ給は堤防とぬりて山と流波  
号くしなり抑當山と名するなり河津二休西の峯又法坐し流  
と休味法尊とし男休権現と稱は東の峯又法坐し流と休味  
冊尊とし女休権現と稱は東の峯又法坐し流と休味  
彼二休の河津天祖の詔を奉り高天原より御駒洲にあまを

是合致ひて州國及び山海草木を流ひく其始め東方震後  
又河之門く此山を生し流く故に長男山とせりなりゆて二休相  
議し流くやう大八洲の國既よ定まらうへんを此國又を若くせんやと  
て初日の林月の神燈子の林素盞鳴尊この日の神神と生流ひ日の神林  
と輪村が峯月の神神の安坐常の峯燈子の神神の系本の峯素盞鳴  
尊の後の峯又法坐し流く又母の二休と常又其藤の巫女と流ひた  
今此神藤の六社これなり此とて祭礼もつてへを至と其むとの両山上  
山下後湯交代の式祀なりしゆの中古流宣又よ門く日月朔日十一月朔日  
の両日又定まらうとて其藤藤方第一の華表又天地間國流波神社とゆける  
令字の額をゆて流く日本又秘の靈山よりて流く和老日流乃神  
跡がれい誰れ結縁を仰がらん

○霊山乃南岳又月輪掌草似とる山岩窟あり先とてはら往昔用山徳一丈七  
て登山し霊窟と稱し巡らまらし樹天皇のをへてより神代を録巻とて  
全部六神の神書を感得ありしをこの山に書し即此山乃奇石室  
彌本靈堂の敷と具たまはる書なりとぞ霊山今又其書とせし  
筆家たこれをして霊堂せり

○霊窟とるの其源系流へ通して河く潮水と漏れ此れむく

安海龍王西天修多羅院又ある所の三十三天及び諸佛と講  
方靈種一口を嵩山に不明神へ献せんとく出現せし龍王の後  
勅法して今の辨材天女これなり靈種龍神の献せし心や  
是と持附り海水漲きく民人の愁あれば今山の本殿聖王と  
祭る地又埋荒とての上傳の傳記を以て社家の傳とせ

○嵩山連袂の授與とのり日本紀又系外天皇に十年乃冬  
月奉武尊赤夷を征し衣比須とてく平け高尾の國  
より降り降る路常陸國を経て甲斐國より酒居宮にて休  
らひ給ひし又燭をとりて所食と進る者あり附々尊かたうとて  
て侍臣又同て食く耳比磨利菟次波鳩領擬氏侍次夜加彌津直  
ト侍臣あへて善りのは「梵」梵又彼燭とともものこれ又ついで流れて  
云く加加奈江天夜接波古乃疾比亦波登於加鳩とこれと云  
ら後世連袂のよるゝかゝる不方

○嵩山又西多度しと云ふあり女人の流は從者西多上人登山の折々  
女侍澄現少女と化現し岩上を立給ひしと上人あやしとて  
「破遠く海辺にまきえの中をさうめあつこそふぎさう  
と吟とこれが少女と何人か  
つぐむは波つとつとつれはまらありともはしりま

とつら入給ふ上人をさうらひて其不より下山ありしうばよう  
名づく

○嵩山の川男倭山女倭山の二の山より流と出二流相合して一ツと  
なり水上と揚川とつれ敷きと川の川とつれり授現の宮居の辺  
とて揚樹多しと号しと陽成院の御製云

はくそんのの巖より授るるは川急ぞつりてふらふ  
百人二首を有は此所秋の流よとの川の末は揚川とつりて  
つとぬりま砂のつをくつて何とて一漏り流て来り何と  
なとつと右の流と云ふ瀬踏せり奉代のたかひとつて地名  
沿革せりやさう川黄の秋云  
常よりもまへるれは揚川とつれはこそまらふとて

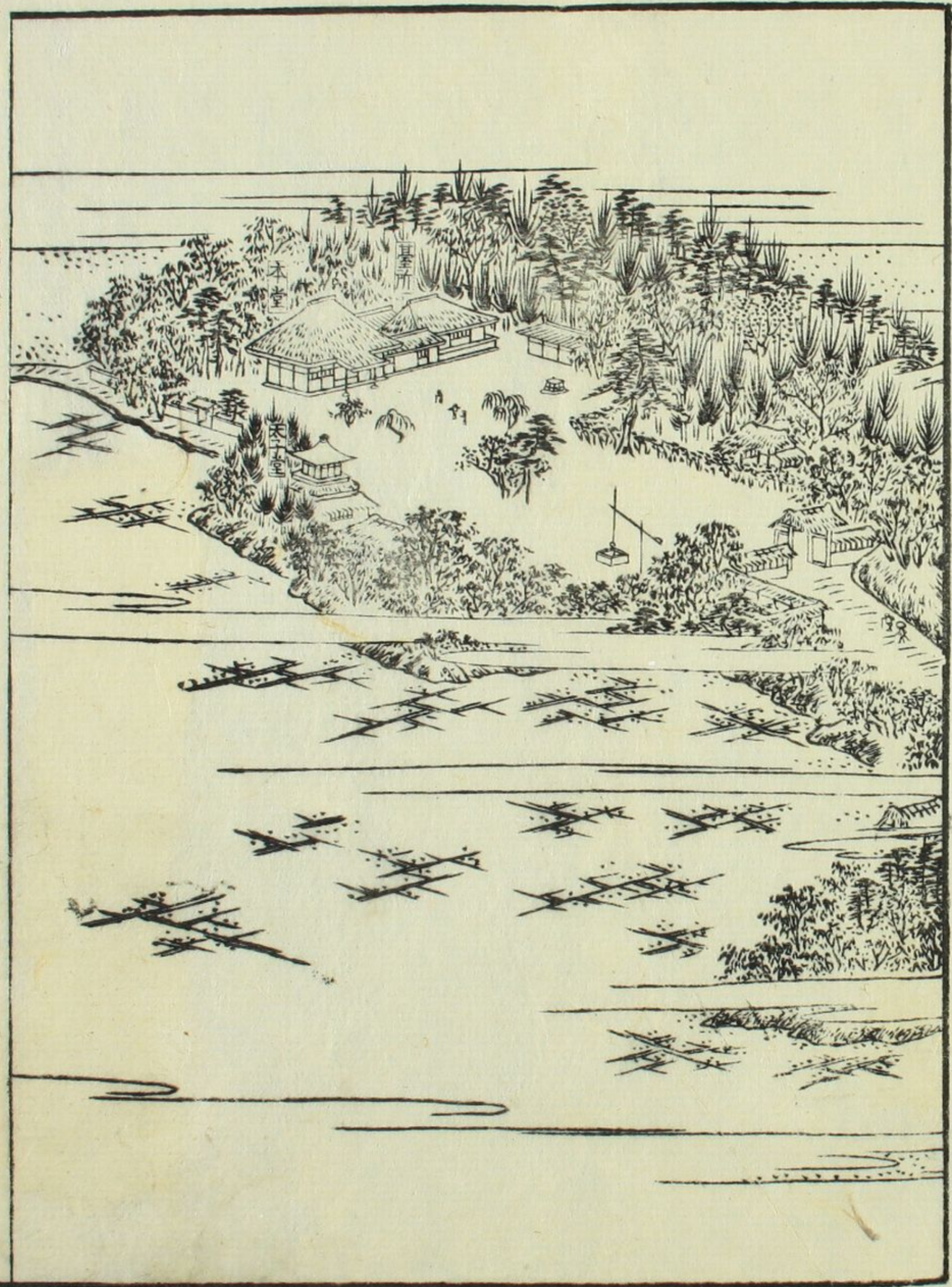
降命山如來寺

東流 旧國日耶 柿岡あり

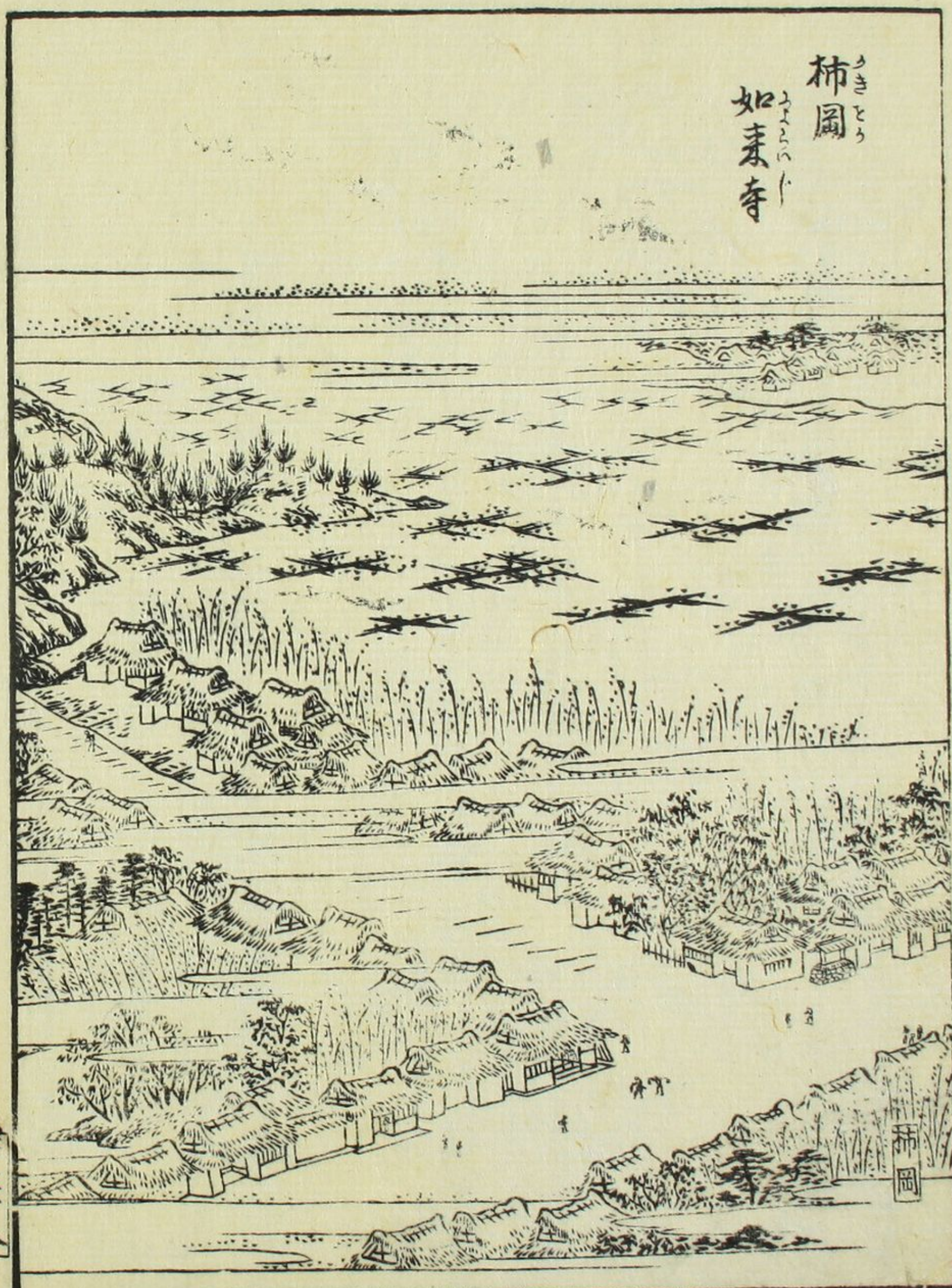
無量壽院と号し僧坊二區

當院は東祖聖人沖造之の寺系あり二十に輩等南莊  
乘光所房の送跡あり乘光房ありと武人ありて俗姓と藤





柿園  
如來寺



原謙子内大臣の後裔尾張守親綱とて幼より武術を過  
猶力ありき強く万夫不當の驍勇なり然るに富因  
の苦業よりよりや舎兄藤原の祚官行岡尾張權守信親  
奉徳大明神重人と唱仰のあり降禱の 明神の託宣ありしより 尊く聖  
人の降依りたり念佛の妙者となりしは親綱もその小  
聖人の化身と夢り忽安心獲得して竟に門侶に加りたり  
貞應元年 其後六年を歴て安徳元年聖人富因信因那霞浦  
の海中より光明出現の弥陀の本像を感得し終に即其  
地信因の浮橋とてなるを以て一字を建立し如來寺と号  
て教化教示すは終に終るが後彼寺と乘光房と附屬し終に  
より門より乘光院房如來寺と相續し専ら弘法化益を  
しといつし坊雅のすめ此浮橋南莊の舊地廢退し及ひ

を後又今の柿園と抄いて再貞とて云 ○什宝 古く本像

の他 子幅名号 六字名号 高祖の所真宗人麻流の名号といふ傳は云  
重人の字道と後系極良後云より傳授

一 終に終る富因神化等の抄より室間の初より徳義村馬取大脚といふ即五等和尙の  
旧跡ふしてこ小其送書あるま不義せられ以て重人といふ 終て是と見終ひたり其  
名法を記してこれを挿擧し終るに 流は普通の内名号といふ幸か其體勢恰り恐  
乃 義福湯其の流は離るに 其終抄をみるに 慮の及ぶにあり是とて思ふに今附重  
人の所真蹟とてその系極流と所  
流の二神ありを初るといふべし

因に云彼徳義村馬槽と所といふに彼若弘仁の次弘法古所富因を授歷  
ありしに長者徳義たり若の家瓜適に此地を教日と送り終るに  
長者が徳意といふに 娘といふこと 三の妻流く病に花をすとの教を  
凡に乱る柳の發のいたとやるる生らる長者夫婦の病を治す  
掌中の珠と愛るるをく又又化すなりたり終るに 所の流より  
病といふに 医療といふに かりといふに 病其を治しりるに 次第に面  
ていし物なるに さいまされに夫婦のたよ是とて さいまされに さいま  
たうをまるとも物の教より彼一人はわいしといひさる其法を需る  
の中より三折の功と後より巫醫これと診察して思へらく此病は是  
外感の病なりん心中に海く思ひ号とるありて終に終る若



戸倉娘懸想  
 大師得若因

色即是空  
 空即是色  
 色不异空  
 空不异色  
 色即是空  
 空即是色



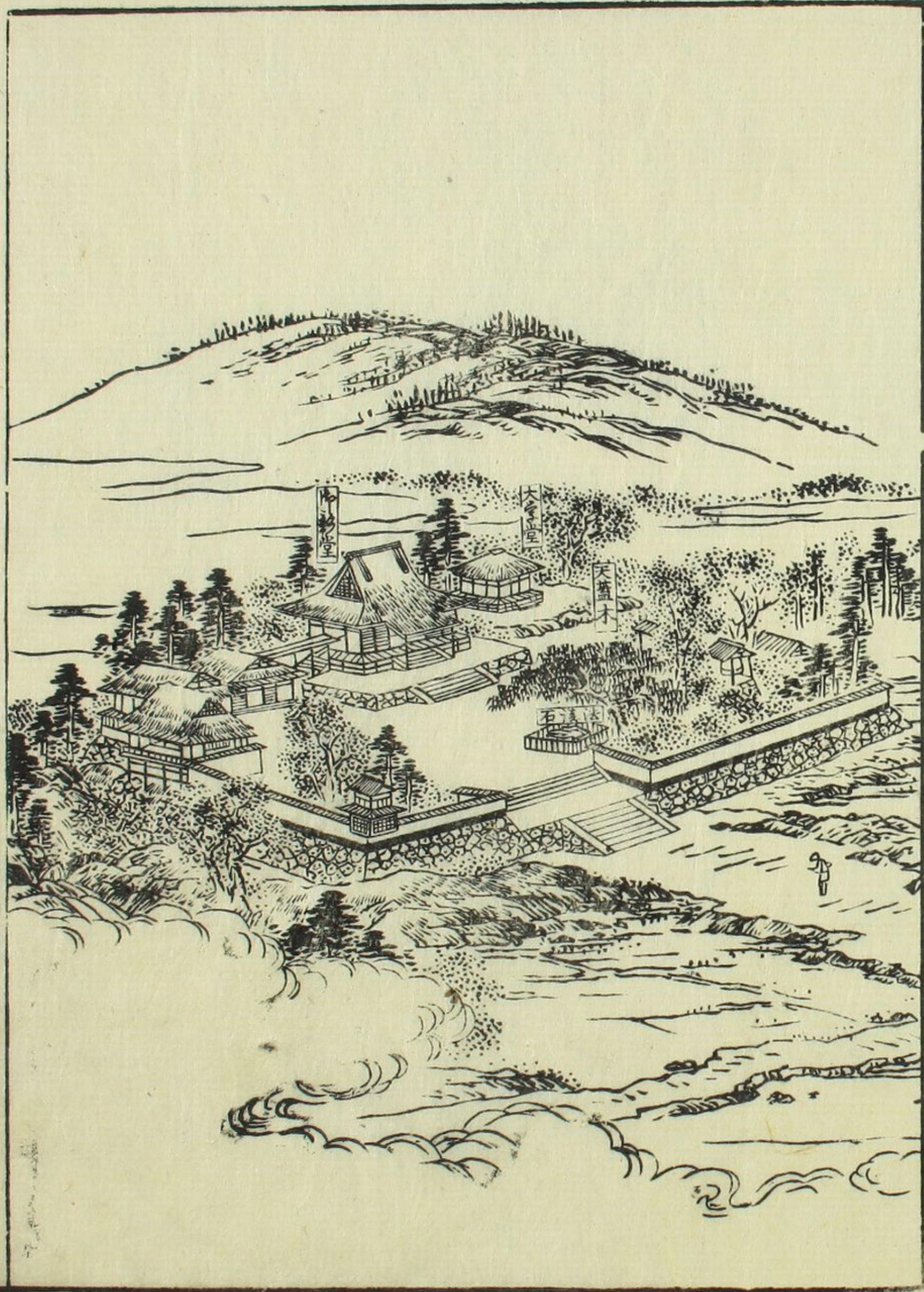
かれが必し其の石の身を叶へん外又美石の船に擧げしとあり  
夫婦のいよゝあきれまじり即佛母の若をて私をこれをつら  
同くむらふさうてさと思ひ死する人の死をい同くむらふへん  
と思ふおれが娘のうしき中よりとを私を又教へ上げ何ぞ  
つとむらふといつそやう我教にひきせ給ふ浄僧とそいひまじり  
より思ひのこころを門にさし入るまじきふ勿辨なやかりより佛母と  
得給ふ浄出まじりに我教にまじりてをさうとよと我度思ひくせ  
とよまじりひの雲の消中う福が今のまゆへ命せめてのそら  
空ありとあらまを佛母また又分りつて於て夫婦又かくと信し  
あまぬるすとはまじりて我教のあまじりいふはして此身を叶へ  
得とせんまのそとと師と信しつて長者夫婦のりのあまじり娘の死を  
たをけ給ふと我教さうふと師いひて信さまじりて母を即側  
まらる桶の櫛より自ら浄姿とらるより忽然腦乃雲を揚膝まじり  
不思議やとくく此浄姿とらるより忽然腦乃雲を揚膝まじり  
ま如冥相の観念ふく直に長者の軍勢とをけしけし切拂ひ  
正養尼と信し終に善提のるまじりいふ小長者夫婦もくまじり  
みのりよ引されく教まのたくとと布引山とらる高山と切開  
せ一掌の伽藍と建まこれと布引山金剛光院徳苑寺と信しと

人學堂

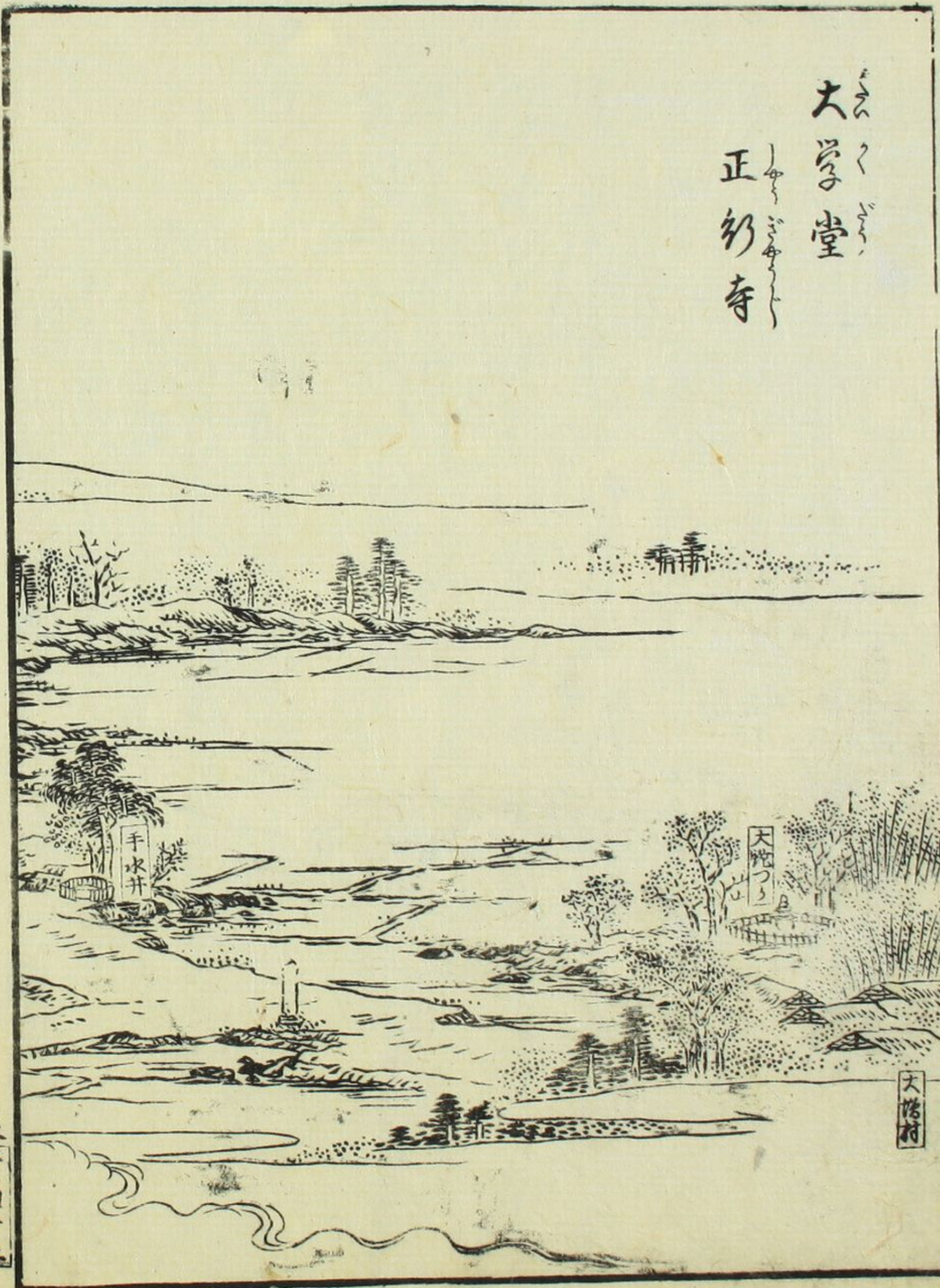
○小中津牧のふりてさう 函國信回郡小中津村とらる其田地とて  
くや其後永遠の以備當田福のさありしが彼大解の所親と  
布引の海よりせ給ひしと換へ給ひしに激は長者の善提いらと  
る一毛よりして大除の大解といややう

聖人函國福田とまじり地せし以府中より福田と降らせ

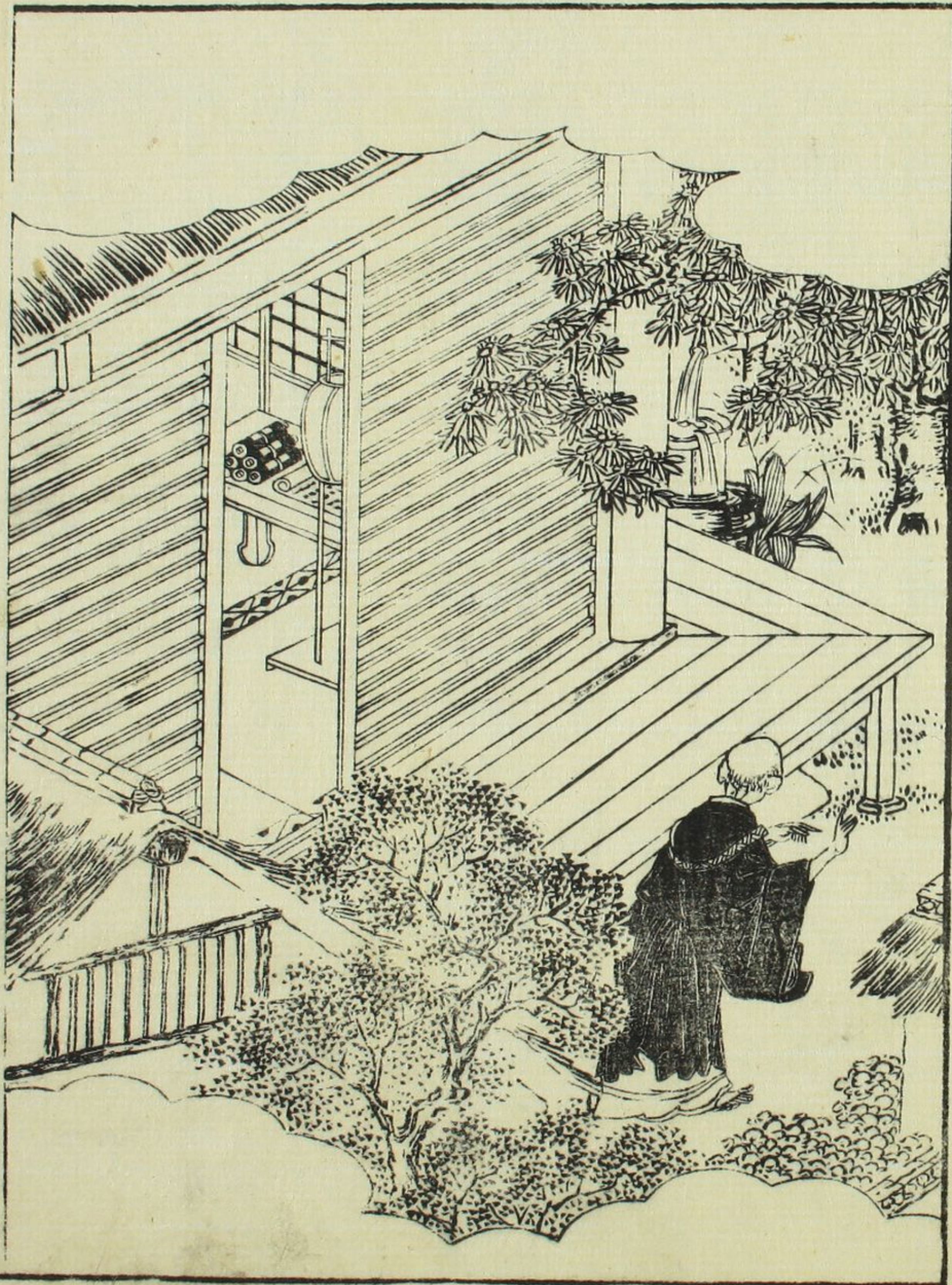
ま入道板敷山の存る瓜とて大塔村のあらさう若國山  
の東を通らせ給ひしと思ひしに彼山の林藤から深淵  
より其長三丈餘りの大蛇逆巻浪を押しけて聖人の方より  
ふ延くして進出し身のみりよづらて恐ろし、されども  
聖人少しと動し給ひ給ひ徐よ歩く考給ひ休今出る何  
のゐるや抑良心を去て若國を求めんと欲するやおま  
億劫の要業とかさく解脱と得る意なきやと宣ひく



大學堂  
正妙寺



天徳村



どろりかぶらとこえ  
大蛇法解脱

弥陀名号の  
仰祈は大蛇  
即得性也  
以彼淨之  
か天ヤをま  
たる三尺の  
細いものう  
るふをー



後三四三

又大蛇忽改をうゑたる兩眼を涙ぎいと人又喝仰の  
けしき見へたるが聖人かゝりて云く我佛法又母ひくも  
先まぐらせる諸悪業も改悔懺悔の功德より内々自ら  
得脱疑ひはしとありて今宵のうちに我を輪回の坊舎に  
訪ひ来りて必蛇身解脱の法と授くべしとて終に聖人  
を以らせ給ふと云ふ其疾疾の内の以女の怒りて外面又毒の  
しりあり聖人又くもささくせ給ひ即痛を用ひて以し入らせ給ふと女  
の涙をうゑて聖人の手に顔きく毒のえ来りて毒のえ来りて毒のえ来り  
毒の妻とて以しが性變性食うく若のるるく若の僧尼の  
列にしがいまはしきつものと思ひ後世の若患の爲るて唯生若の  
毒をまよひまの毒毒と悪と瞋恚のかむ胸とこけし  
止附るく終に蛇身して死するが多生の悪業一附に報

い今かく蛇形の若くとうけ常又水中にば住なぐ身  
も三勢よりこがさし鱗甲外又堅しと人とも百文の毒虫  
其内よあま肌と噛むひり針を以て刺すりもさるべし  
何れに飲りて聖人化益の利生とて此大若悩を救ひ給  
へと云く懺悔とばしとて聖人奇特の思ひとばし  
即一封の血脈を授けて云く昔海屋の龍女の如來の法と  
信受して即身即佛の果と受け又摩羯の大魚の佛の御  
名を信しとて暴心と翻へて吾因と得たり是此一  
封の即如來の德の名号及び法名なりと云く本  
師法皇の孫陀尊の煩惱悪業の衆生とありとて救らせ給ふ  
を汝努く疑へりて一向一心と信しとて救ふ事ありと云く  
受定往生せんものなりと云く報謝の称名唯南无阿弥

陀佛と唱へる」とつゝ慈又教化はし給ひしうの女のこゝろ  
頂戴き嬉しき聖人を伏拝しし竹石もさうく其後慈悲  
しうく彼淵の大蛇死して水と又深し」と沙汰しる所の聖人  
即かゝるにさうりて見給ふ猶うの二封と改まらざりし此  
又抄ひく聖人里人を誘ひ給ひ彼屍と去中二埋之塚と築  
三日三夜法燈を設けて念佛し給ひ多うかくと安まり満  
方の糸指市を設けてはどひ来るかゝる聖人附こそ来まど  
思し給ひ大蛇と縁として不信邪見の者と教化し給ふ  
眼着因果の理と慈悲孤陀大慈の源恩をうらみと忽ち信  
利益を蒙る者教をまらざりしとく去後又今宵三夜と云  
よ阿ふ門く不思議なるる莊嚴端審なる天女来降し聖  
人と礼拝し我のこゝれ彼淵の大蛇なり辱くも尊師の神化

奪よよ山くまきやく小蛇身とまぬがま天女の果と得たり順  
次は津去又往生せん何の疑ひくあまきんが此大恩と謝  
せんためとさら又来門てま刃之糸くせり廣大恩徳と空  
教喜とるらふ称して聖人を再拜しやがて白雲と際じ  
て立さりぬとや明傳即彼塚とくま大塚村の小なる大塚  
先方り中右鎌の大蛇傳堂のやうく又聖人植立給ひたる天蓋  
本とく大樹あり楠の本り○什室六名名号聖人真等うての  
大蛇と樹のうたまふ

板敷山

大坂の豊より八丁筑波の小の尾なり後頂富士権現  
を祀りて豊より八丁筑波の二如上人所願くは不之と云

當山の往昔高祖聖人付は町 年十九當國橋田所居はしめて柿岡  
等所教化ありし折々往返し給ふ石の熟路也世がうり山と稱さ  
るゝ其以當國那阿都東建尾と云ふ石に後の優婆塞と送系

の通路



板敷山

五甲ぬら

板敷の  
ふん秋

あし  
あし  
あし  
あし

御名



板敷の  
後

聖人の後

あつて後  
あつて後

あつて後

あつて後

あつて後

あつて後

あつて後



板敷の  
後

聖人の後

あつて後  
あつて後

あつて後

あつて後  
あつて後

あつて後

あつて後  
あつて後

播磨公辨園と云ふ修徳者あり

四ノ重慶院の御内ありしが智徳兼修の人なりしは徳竹末賢と云ふと云ふ

釈不の先達と云ふは後

圓中山伏の司として

末流十二坊と提轄す

これより門く諸人の多敵大方なるは圓智徳兼修の人として

専ら妙者の再来とぞやなり猶も小辨園附三素久三聖人の

徳の廣きを以てより修ふに親跡を論ぜば其化益と蒙

らざる者なくともうは活如來のごとく尊くもくもく成徳さす

思ひいでや我の徳を以て是と擲んと我の徳の眩と叫けけ

密に此山に登て咒咀の法を修今山上石の五輪法け於が

いふものや渠が修するを法是まで一度も修さざる

何れぞ小聖人の御身は柳障なく仕徒して遠近の若

別なく教化のすまふ奈支の修人と見く辨園いよく客

心はのり此に聖人け板敷山と往返はし修を究意の奉

と香属教多かうといつと各刀槍弓箭を推のへ安の坂を

彼石の谷間又伏くして聖人の来り修ふ不と伺ひたるこそ

悲しけき山の根のいづりか附の以と云ふは百八田と云ふ田地あり辨園のわづらひ

るあり親愛の道と云ふ是即ちかくて聖人の神佛擁護の御身は

恰も隠の術を以て修ひ修ふごとく此山の往返日くは

ひはとて辨園が後曾て遮毘むる者一人もは安

押ひくしての辨園殆奇異の思ひをば信と切たる我

の法も今更疑ふ不あまは不詮聖人の香刹は修ひ

面對活して其端を以て叩むやと思ひ遂に稀田の禪室は

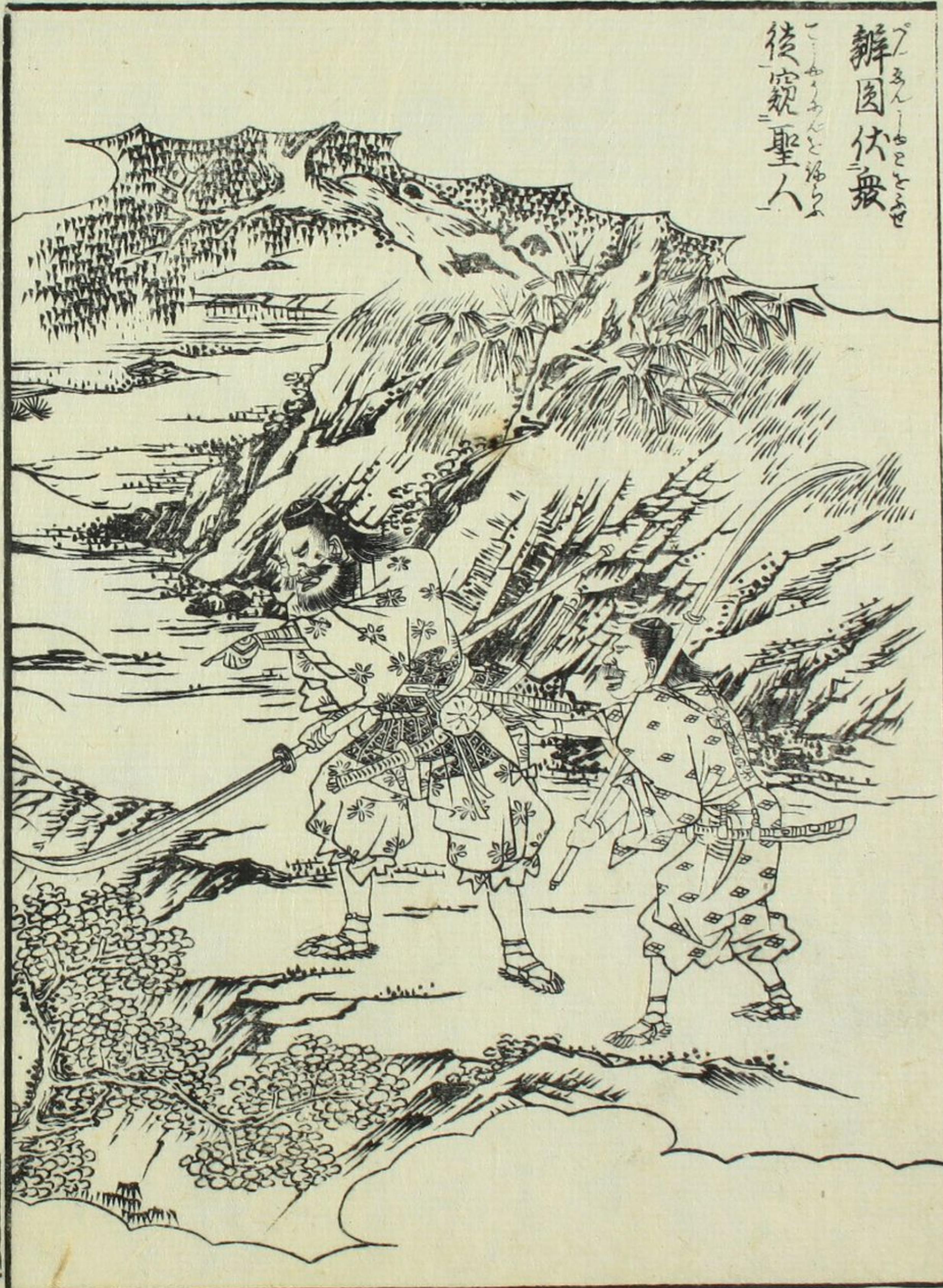
はひまのしが聖人たななく山合修より辨園の教を

はしく拜しなり害心忽ち消滅し改悔の心頻はして

即ありとまよひ日暮の背懐より聖人と當しなりんと世



辨圖伏衆  
後窺聖人



みだ遂二のなきが聖人 稽顙さ終るる氣さうく見へくわぶ  
辨因いよく 聖人の高德忍辱慈悲はまはるるを嘆伏  
一善我懐心の畏ききつを私忽中條掛とあるがうとて  
聖人を三拜し我既まま年修の功徳をんてに海の表  
まんのを思ふの懐心より忽ち嫉妬の魔障とせし 未永永  
劫悪報に墮せんとせしよせめてい少し 吾因の據あはるや  
聖人大徳の海容をうけく慈悲を拜しなるの實り優  
曇曼陀羅華の三々奉れまは値るらうそ懸念一時  
教は法徳のききと仰ぎまはる今と修せし 胎令支部  
瑜伽三密の功力は何んせん 教く聖人憐れをまはる  
一語行言の示教より教らば長く門徒に陪侍せん信心  
吾二の懺悔のありさま聖人奇特と思はるるは刻印して宣ふ

かうま我真宗の法方やたとい極を衆人よりくも 弥陀  
成佛の本願をいれ我が身にあやまらるを深く歎き一向にた  
まけ終るとやさん人の推し往生と遂ごらん而未の報恩謝  
徳の称名成なるのみまうく即ちまうせて身  
とほし法名を明位房徳信とぞ法ひたり  
係りしより以来聖人の常陸給仕し 初の高相引くて乘  
腰慈悲の姿あり 怨は張る弓の款いつし 西よ入るの  
月と詠むるこそあがたれ其後日圓松原まひて一字を建  
立し 上宮寺と号し 弘法化養ありしは聖人御降洛の  
後の猶原に深居して信心堅固と称名なるのうつくや  
多るが竟に建長三年十月十三日六十八歳を一期とし 日出  
度往生と遂らとたり 滋や富山の信心久しく真性得悟の

干時利年三十二歳二十  
日華年十九番 証書

若縁を後びるの靈場なり河傳抄より順送の二極交い  
なりとるも是偏高祖聖人威神靈勝の洪徳表取  
とるなりとるなり

稲田山西念寺 永流

日國本郡 稲田郷あり

東河門跡の河懸所にて稲養院と号し往昔高祖聖人二十  
九歳の河州六南堂般世菩薩の靈告を夢り終ひし其  
後身合りて終る所の勝地にして十餘年の河州居位は  
一真法利生ありたる芳趾也。○本堂本尊阿彌陀佛  
僧舎三區あり尚院建保五年の春高祖聖人  
園小橋郷よりけ地を移りて岡輝の地より一寺と建てる  
終ひ幽栖をら終るに遠高石を埋め極言言ひとるも  
其妙道信河法を去るに猶素老弱法味を引られし所の

石よりは不せれまぐ群集とほし聖人と稱依く其教とる  
り恰も世尊在世の如し安んぢひく聖人といひやうし終る  
や佛法弘通の如懐既成就く衆生利益の宿念忽  
と満るに先令く尚初般世菩薩の告命今も抄ひて并合  
せりとく大に教をせ終ひ即終命命して歎喜踊躍山  
降貞寺と稱し終る其後聖人  
に附屬し河降洛河にせ終ひくは若性河房即尚院  
を受持し終るに教年たりと惜いなる兵火のくも靈場  
悉く灰燼と如くする終るまよりと總州砥部信長と沼  
等へ次第に移轉し今既も城の後州高田に安在と云  
田河坊に聖人河直をす稲田河坊と  
若性上人河直の千手衆の撰書と云物あり  
度養房 信性山園の住人源家の孫稲田九郎重く若性上人河直の撰書と云物あり  
其時と得て聖人の撰書と云物あり

度養房

信性山園の住人源家の孫稲田九郎重く若性上人河直の撰書と云物あり

